



<http://hdbkyoto.jp/>

YEARBOOK 2018 VOL.43

研究者棟新築及び
本館耐震・改修工事にむけて III

Kyoto International Student House



(公財) 京都国際学生の家

Kyoto International Student House ・ Haus der Begegnung Kyoto

PRINCIPLE AND PURPOSE

by Dr. Werner Kohler

“Haus der Begegnung” is a house where men from different continents and cultures, of different races and colors, different social strata, religions and outlooks live together. The house members face realistically the difference of national, cultural and religious backgrounds. It is a “House of Encounter” as its name “Haus der Begegnung” indicates. It is an experimental training place for peace, which is not merely absence of war, a training place for the construction of a new form of society necessitated by the demands of the world of tomorrow.

The house life is guided by the following considerations.

1. The living together in the International Student House Kyoto is not an end in itself. Nor is it a world of its own. It is concerned with the daily human society to which we all belong. Our human society, as history shows, is in need of constant renewal. Forms of society change, old traditions decline, new ones arise; but Life Together is the destination of man.

2. Life Together is life in relation with others, with those we like and those we dislike, with those who have different convictions and opinions. Life Together means love and respect for those who are different. We have the freedom to agree to disagree with one another.

3. Life Together is life in daily renewal. We all have a natural inclination to favor our own beliefs and concepts. The house members let themselves be mutually questioned and challenged in their opinions, attitudes and habits. By nature we are inclined to have relations with, and fulfill responsibilities to, our own family group and those of our own social milieu or those that are useful to us. We aim to outgrow these self-centered inclinations. Life Together allows for diversity and runs counter to conformity and unconformity. The traditional societies classify people according to their educational, political, moral and financial standards. Life Together transcends these traditional classes.

4. Life Together is an adventure and an experiment. “Haus der Begegnung” in Kyoto practices in small dimension a new form of society. This new society is both conservative and revolutionary in that it respects the past with its traditions and looks to the future with its possibilities. It is a form of society which is renewing itself in free self-criticism of its members. The basis of this Life Together is Life itself.

Thus it is hoped that students living in this house are willing on their own initiative to participate in various activities such as seminar-like meeting, common meals and house chores of different kinds.

*Dr. Kohler was the most central among the forwarder of HdB in 1965. He and Dr. Inagaki served as the first House Farther.

表紙デザイン : Hyeri Lim

巻頭言

留学生を翻弄する政治と留学生基金

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授)

留学生や外国人観光客等と交流された経験のある人は、文化、慣習、宗教、人種等の違いを肌で感じることもあるが、ヒトとしての違いは全く無く、同じ「地球市民」であるという実感を持ったと思います。その一方、何故この世で戦争が無くならないのかと不思議に思ったこともあると思います。私自身、学生時代から 60 数年、留学生や外国人研究者と付き合う機会も多く、困ったときにはお互いに助け合った経験もあります。しかし、私自身の力が及ばず、助けることもできないばかりか、残念ながら彼らを逆に苦しめる結果になった経験も多々あります。

そのような場面は、彼らが異なった政治体制に属する地球市民であるが故に、命の危険に曝される政治的変化によって起きています。そんな場合でも金銭的な準備があれば、少しは手助けできたという反省から、私が(公財)京都国際学生の家 (HdB) の理事長職を引き受けた際に、「留学生基金」を創設しました。

そのきっかけは、今から 30 年前の 1989 年、私が二度目のハウスファーザーとして住み込んでいた頃の事件でした。当時 HdB には中国からの私費留学生在が 3 人在寮していました。その年の 4 月頃、リベラルな指導者として人気の高かった胡耀邦元党総書記の死を受けて、中華人民共和国・北京市にある天安門広場で学生・市民たちによって追悼集会が催されましたが、その後「独裁主義、封建主義打倒」「憲法の基本的人権擁護」などが叫ばれ、民主化一般への運動に拡大して行く中で起きた事件でした。5 月 20 日、建国史上初めて首都北京に戒厳令が施行され、学生・市民らは当局の軍事行動を阻止すべく市内に入る各要所にバリケードを築き、さらには人民解放軍への直接説得活動も続けるなどをして根強い抵抗を示していました。戒厳令施行から約二週間、当局は鎮圧行動に出ることもできず、両者の対峙状況が続いていました。学生・市民を支持する声は海外にも広がり、これらの報道を見て民主化が起きると我々も感じたし、当時の留学生も感じて、円山公園に集まって天安門の若者達と呼応する行動をしていました。しかし鄧小平は一切の妥協を拒否して、6 月 3 日未明ついに戒厳令部隊を出動させ抵抗する学生・市民に発砲、4 日までに数千人の学生や市民が亡くなり、活動家の多くが捕らえられる六四天安門事件が起きました。この事件を契機に学生達への仕送りはなくなり、中国公安から身を隠す必要が出てきました。ある中国人留学生の一人部屋に病気をした女子留学生が身を寄せる事件がありました。当時は女人禁制の男子寮でしたので、出て行って貰わざるを得ませんでした。もし HdB に余裕があ

り、ハウスペアレントにもう少し権限があれば（経理を握る事務長の力が強い）、ゲストルームに移動させるなど、少しは助けてあげることが出来たのにと心から悔やまれます。今は彼らが何処かで無事に生きのびていることを祈るばかりです。当時、ゴルバチョフ氏の訪中にあわせて北京に来ていた外国報道機関によって世界中のテレビに民衆弾圧の映像が流され、「民主主義への挑戦」「人権弾圧」と受け止められ、アメリカなど西側諸国は中国に対する「経済制裁」を課し、日本も同調して第三次対中円借款供与も中断した大事件でした。

ビルマも大きな動きがありました。今から 52 年前（1967 年の 3 月）、1 期生の日本人学生であった私も滞在期限の 2 年が過ぎ退寮しました。同じ頃退寮したビルマ人留学生 A 氏の行方が突然分からなくなりました。ハウスペアレントに聞いても友人達に聞いても、消息は完全に途絶えてしまいました。彼とは寮生になる前からの親友で、京都大学で「京大留学生友の会」という日本人と留学生との交流団体を私と一緒に結成・運営し、初代会長に就任した人物でした。入寮後も、何のルールも無い寮から現在も使われている HdB のルールブック作りを主導していました。我々のような年配者は、市川崑監督の「ビルマの豎琴」という映画で、「ビルマ」という国号にはとても親近感を持っています。しかし 1989 年に国号がビルマから「ミャンマー」に変更したことで、若い人達にはビルマという国号には違和感があるかも知れません。当時ビルマ出身のウ・タントがアジア人初の国連事務総長をしていたこともあり、A 氏も将来国連事務総長になる人物と信頼され期待されていました。

それから 10 数年後、音信不通だった A 氏の便りがカナダから着きました。その後、私がアメリカのシカゴに留学中にトロントの A 氏家族(奥さんは日本人)に会いに行き、その空白の時間を埋めるお話を聞きました。当時ビルマは、軍が実権を握り生粋のビルマ人を重用する政策を取り、彼のような中国系のビルマ人は要職に就けず、既にご両親らの財産も没収されるような状況であったそうです。帰国しても日本の大学院を出た実力も発揮できない状況から、国を捨てる決断をしたそうです。でも彼のビザは 3 月末日まででしたので、それ以上日本に残ることも出来ません。しかし幸いなことにカナダ領事館のある領事官が、その日で退官することになっており、A 氏の話聞いて彼が全責任を負う形で、カナダへのビザを発行してくれたそうです。カナダに渡った後、なけなしの金で購入した中古車でバンクーバーからトロントまで 4 月の凍てつくカナディアン・ロッキー越えは本当に命がけだったそうです。更に人種差別が残るトロントでの就職は非常に難しかったそうです。幸いにも日本で学んだ知識が役立ち、市の職員となり素敵なマイハウスと幸せそうな家族にお会いできました。このカナダ領事官の話は、第 2 次世界大戦時に多くのユダヤ人を助けたリトアニアに赴任していた日本人外交官杉原千畝氏を思い出させてくれました。当時同じビルマ出身の B 氏もアメリカに亡命したことを聞きましたが、会うことが出来ず、早く亡くなられたと聞きました。

その 8 年後（1975 年）、私が 1 度目のハウスペアレントをした時に在寮していたビルマ人留学生の C 氏は本国に帰国されて大学の教授をしていました。しかし、ある日

京都市内から電話を受け、驚いて HdB で C 氏夫妻と再会しました。事情を聞くと奥さんが日本人であったため、その子ども達はビルマの国籍が取れず教育も受けられず、国を捨てニュージーランドに移民すべく、妻の実家の京都に立ち寄っているとのことでした。それから数年して無事オークランド大学で教授をされているという連絡を受けました。何度もニュージーランドに訪問するようになされている内に、彼は定年となり悠々自適の生活を送っていましたが、家の中での転倒事故で 2014 年に亡くなり、残念ながら二度と会えなくなりました。大変惜しい人物を失ったと思っています。

ビルマは 60 年代から軍部が台頭し、社会主義路線をとる軍事政権が現れました。その軍事政権は 80 年代以降には京大で学んだことのあるアウンサンスーチー女史を指導者とした民主化運動に対して、弾圧を続けていました。その後も民主化運動が断続的に起こり、2010 年に自宅軟禁を解かれたスーチー女史が政界に復帰、2016 年 3 月に国家最高顧問として実質的な政権の座についています。しかし、ミャンマー国民を詳細にみると 135 以上の少数民族がいることや、天然ガス、金やルビーなどの地下資源あるいは麻薬などを巡って外国からの干渉等もあり、国家運営は非常に困難だと思われます。しかしスーチー女史が指導者としてロヒンギャに対する暴力・虐殺に何の対応もしなかったとして、パリ市名誉市民の称号が剥奪されるなど、ミャンマーの政治は今も迷走を続けています。

HdB 開寮当時は、ベトナム戦争時でした。アメリカ人学生もベトナム人学生も同居していました。ある時この戦争を巡って、二人の間で大げんかになりました。HdB のハウス・ミーチングでこの問題を全員で何回か討論したこともありましたが。個としての寮生も議論になると自国を背負うのは仕方ないことかも知れませんが。自国を背負わず冷静に話し合うという難しさは、普通に付き合う中でも、私自身も何度も感じたことでした。自国の歴史や文化、宗教などの知識が不足していることや、相手の国の歴史や文化、宗教なども知らな過ぎることは、相互理解への障害になります。考えると学校では日本や世界の近代史は時間切れで学ばず、東南アジアの歴史などは記載さえも無く勉強不足でした。歴史書は勝った方が自分の都合の良いように書き換えられているのが世の常です。異なった書を読み大局的に物事を観て、何が正しいのか自国の歴史や世界の歴史を見つめ直していくことは非常に大切だと思います。

200 万年前にアフリカで誕生した人類は、同じ血を分けた兄弟にもかかわらず、地球上に広がっていく中で、肌の色や文化や風俗・習慣、宗教や政治形態を異にしてきました。更に大脳皮質を発達させ、原爆や遺伝子をコントロールする神の領域の力を付けてきました。しかし、お互いを殺し合う獣的感情をコントロールすることは未だ出来ていません。ただ、ここで獣的と書いたが彼らは争っているように見えてもよく観察すると、自分の優位を示すだけでトコトン傷つけることはない。肉食獣でも満腹なら獲物が通っても襲うことはない。ヒトだけが一番残虐である。何故なのだろう。有限の地球上で限られた資源を分かち合う地球市民として、どのように共生・共存できるかについて、真剣に取り組まなければ、地球をも破壊する兵器をもつヒトは、自分達だけで無く地球上の全ての生命体をも破滅させる悪魔に成り下がる恐れがありま

す。

今から 2400 年前に孟子が「春秋無義戦」と言っているように、300 数十年間続いた春秋時代は戦争に明け暮れていたが、自国の利益を拡大する為の戦争ばかりで正義の戦いはなかったという意味だそうです。19 世紀、20 世紀、新しく迎えた 21 世紀も同じことが言えるのではないのでしょうか。世界の歴史の中で長く繁栄した国は、肌の色や文化や風俗・習慣、宗教やイデオロギーを異にする人達を受け入れた寛容な国だけであったことを、人類の歴史から学ぶ必要があると思います。

HdB が皆様のご協力を得て、建物の耐震・老朽化を乗り越えて、次世代を背負う世界の若者を育てる小さな道場の役割を、今後も果たせることが出来たらと願っています。

～ 目次—CONTENTS ～

・内海 博司	巻頭言：留学生を翻弄する政治と留学生基金……………	1
・目次	……………	5
【募金活動について】		
・内海 博司	第一期工事・募金趣意書……………	7
・平野 克己	募金活動報告と今後の課題……………	8
・山田 祐仁	村形明子先生について……………	17
【留学生問題について】		
・内海 博司	留学生と外国人労働者問題……………	19
・村田 翼夫	日本語教育の必要性と課題—日本語指導の体験をもとに—……………	24
・A. Hidding	Health and Wellbeing of Academic Visitors in Kyoto……………	29
・秋津 元輝	私と京大農学研究科の留学生事情……………	31
・Arno Suzuki	Changes in student housing……………	34
・嘉田 良平	アジアで広がる自然災害のリスクにどう対応すべきか ～新たな資源管理システムと日本の経験～……………	38
【OM 便り】		
・倉田 麻里	三重の田舎にも「出会い」の場を —ゲストハウスイロンゴをオープン！—……………	40
・I-Ting Liu	The Legendary Ping-Pong Boy……………	41
【レジデントより】		
・赤尾 奏音	HdB がくれたもの……………	44
・韓 思平	Nice meet and big growth in HdB……………	46
・Hai Trinh	HdB—place for more experiences and better self-exploration……………	47
・Alexander Van-Brunt	Farewell to HdB……………	49
・Van Der Struijk Stef	さよなら HdB……………	50

・ Sandra Marie Beverungen	So... What do you actually believe.....	51
・ 大川 夏海	やって みなきや 変わらない 苦手克服できたんちゃう！？	52

【活動報告】

・ A.Hidding、Y. Iida	A Strong Reminder-Message from the House Family	55
・ 2018 年度 寮生活動行事	56
・ 2018 年度 Welcome Party speech	57
・ 2018 年度 寮生活動報告	58

【資料】

・ (公財)京都「国際学生の家」役員等	64
・ 2018 年度 補助金・寄付金・その他ご支援	66
・ 特定寄附金の募集に関わる募金目論見書	68
・ (公財)京都「国際学生の家」の略史	69
・ (公財)京都「国際学生の家」利用者の集計	73
・ 後援会会則	76
・ 施設概要	77

薦田 正人	編集後記	78
-------	------------	----

【募金活動について】

第一期工事 募金趣意書 京都国際学生の家（HdB）存続のための募金のお願い

（公財）京都国際学生の家理事長 内海 博司
（京都大学名誉教授）

1. 「京都国際学生の家」とは

京都で初の「異文化共生」を掲げ、外国人留学生と日本人学生が共同生活をする「混住」型学生寮です。1965年4月、スイスと日本の民間人の協力による寄付金によって京都大学の南隣り、吉田山の麓に誕生し、爾来半世紀に亘り、83ヶ国、約千人の学生が生活を共にしたのち、国際人として世界の各地で活躍しています。大学の街と称される京都から世界へと雄飛する学生、研究者が、京都で体験する数年間は貴重な財産です。多文化共生を理念に共同生活の場を提供する「京都国際学生の家」は、学生だけでなく研究者へもゲストハウス（研究者用別館）を提供してきました。しかし、別館は改修も不可能で解体を余儀なくされ、資金難で再建のめどがつかず存続の危機に瀕しています。

2. 半世紀を経た建物の改修計画

開設以来、個別事案ごとに対処して参りましたが、本館は東日本大震災で見直された耐震基準を満たせず耐震対策を迫られており、同時に上下水道やガス・電気のインフラ補修も急務です。研究者用の別館は継続使用が無理で解体が必要と診断されました。本館の耐震改修等に約1.5億円、研究者用別館の新築建直しに約1億円が必要ですが、資金不足のため2017年9月より募金活動を進めてまいりました。しかし募金活動開始から現時点（2019.3）までの寄付金受付額は約2千万円にとどまったままで、当初の計画（本館改修および別館新築）は実行不可能となりました。

3. 当初計画の変更と新たな募金3千万円にご協力をお願い

資金不足のため内容を再検討して最小限の改修にとどめることとし、本館のみの9千万円規模に縮小した工事を第1期計画として2020年4月に着工することにいたしました。寮生の生命を守る耐震対策と最低限のインフラを維持できる老朽箇所補修対策がいますぐ必要ですが、これまでに寄付いただきました2千万円および改修に使用可能なHdBの資金など合わせてもまだ約3千万円不足しております。新たな目標額3千万円の募金活動を開始することになりました。募金活動によるご寄付に頼るばかりでなく、自助努力として寮費の値上げによる運営資金の確保に取り組む予定です。なにとぞ皆様のご協力をお願い申し上げます。

どうか皆様の知恵とアイデアで、この国際交流拠点を維持できますようにご協力をお願いいたします。また、HdBの理念にご賛同頂きまして、当財団の活動にご参画頂けたら幸いです。

募金活動報告と今後の課題

平野 克己

(募金委員会事務局長、HdB 評議員)

I. 募金活動計画の経緯

開設以来半世紀を経て老朽化が進む京都国際学生の家（HdB）がいまこそ世界に必要な多文化共生を継続するために建物改修・新築が必要となった。YEAR BOOK の SPECIAL ISSUE Vol.41 で示された「研究者棟新築及び本館耐震・改修工事に向けて」は、2017 年 5 月の第 11 回理事会で最終決定され、同時に吉村委員長、嘉田事務局長を中心に「募金委員会」が発足した。募金委員は内海理事長を始め理事、評議員に加えて、寮生と事務員である。総工事費は 2.5 億円と算出され、大半を募金でお願いすることとして 2017 年 6 月スタートした。

募金委員会の顧問として、京都大学元総長の長尾 真先生（京都大学名誉教授、元国立国会図書館長、2018 年度文化勲章受章者）、京都商工会議所の立石義雄会頭（オムロン株式会社名誉会長）に就任をお願いした。更に、開設以来の協力者である基督教イーストアジアミッションの他に、京都仏教会、明日の京都文化遺産プラットフォーム、留学生スタディ京都ネットワークにも後援としてご賛同いただき、体制としては京都の主要な組織が連なった形で活動を開始した。

具体的には、6 月 13 日から京都市、京都府の関係先、京都商工会議所などを順次訪問し、種々のアドバイスを受けながらの募金活動を展開した。さらに、京都国際学生の家 の 窮 状 を マ ス コ ミ 関 係 者 に も 訴 え、京 都 新 聞、中 国 新 聞 に よ っ て、京都国際学生の家設立の経緯、耐震・老朽箇所修理対策での苦境などが取り上げられた。

改修後の継続性を考え、半数の学生とハウスペアレント、事務を在寮のまま行なう期間 1 年にわたる工事、本館の耐震補強と老朽箇所補修および研究者棟の新築という工事に必要な費用 2.5 億円に対する資金調達を計画した。

当初予算計画（総額 2.5 億円）

積み立て準備金	： 0.3 億円
改修・新築のための寄付募金	： 2.2 億円
うち民間企業、団体等	： 1.45 億円
個人・クラウド	： 0.3 億円
個人・HdB 関係（卒寮生 1000 名）	： 0.3 億円
個人・その他	： 0.15 億円

寄附の大半を期待する京都財界が加盟する京都商工会議所には数回足を運び、9月26日の「常議員会」では約100名の常議員の方々に資料を渡すことができた。これを機に各企業に訪問活動を開始したが、なかなか核心の担当者へたどり着くことができなかった。特に、会頭、副会頭の企業には特大の配慮を期待して長尾顧問よりお願いしたが、2018年3月末時点で、企業からの寄附申し込みは2社計200万円のみであり、この先の見通しも決して明るくない。

一方、個人の寄付に関しては、10名109.5万円に達している。

京都国際学生の家歴史の灯を継続させるために、いま関係者こそが当事者となって英知を集結して事態に対応し危機を乗り越えたい。

II. 2018年度（2018.4～2019.3）の募金活動

2018年度は2017年度の結果を踏まえ、企業への継続的な募金活動以外の新たな取り組みも行ない幅広い募金活動を展開したが、目標とした2.2億円の10%程度しか集まらなかった。しかし頻発する大地震への備えは一刻の猶予も許すものではなく、大幅な計画変更となるが、人命に関わる「本館耐震・改修」を第1期工事として先行させ、「研究者棟新築」は第2期工事として後回しに取り組まざるを得なかった。

但し第1期工事のみであってもいまだ3千万円不足する計算となり、この募金活動を継続し早急な目標額達成が必要となる。さらに第2期工事を具体化させ、新たな募金活動も開始することになる。

1. 2018年度の募金活動

① 個人への依頼

京都国際学生の家開設以来の関係者、居住経験のある旧学生等に YEARBOOK や趣意書配布により寄付・募金の依頼を行った。

② 京都商工会議所

前年度に引き続き京都商工会議所を通して京都の多くの企業に寄付依頼を行った。優良企業が多数活躍している京都での募金に大いに期待したが、2018年度はほとんどが保留となっている。

③ 京都仏教会

京都仏教会の働きで、2018年5月に清水寺、金閣寺、銀閣寺に募金箱が設置され、NHK、毎日新聞などが報道してくださった。（3月に終了予定）

④ クラウドファンディング

多くのクラウドファンディングサイトの中から「朝日新聞 A—PORT」を選び、3百万円を目標に9月から12月まで行った。

⑤ ロータリークラブ、ライオンズクラブ

京都市内のライオンズクラブ、ロータリークラブ数十カ所に直接郵送でお願い

した。

⑥ マスコミでの広報のお願い

T V局および新聞各社に京都国際学生の家活動や募金活動について、放送および記事掲載を依頼した。

2. 2018 年度募金結果

① 個人

大口では、長尾真募金委員会顧問、所久雄HdB顧問、内海博司理事長やOMの
薦田正人氏からそれぞれ100万円、故村形明子名誉教授（京都大学大学院人
間・環境学研究科）の遺産である国際文化・芸術交流関連の蔵書を保管・活
用する等の目的で、教え子である山田祐仁評議員（OM、ハウスコミッティー
委員長）を通じて蔵書とともに1,000万円の寄付を受けた。

② 京都商工会議所

会頭企業のオムロン株式会社より 100 万円、名誉会頭企業の村田機械株式会社
より 100 万円を頂いた。その他の有力企業へ再度お願いに動いているところだ
である。しかし、客観的に見て、企業が 100 万円以上を寄付することは非常にハ
ードルが高く、かつ 10 社以上に期待するのも困難が予想されるため、大手企業
以外への寄付活動の開始も急務となる。

会社、企業としての寄付には該当会社へのメリット面などにおいてかなりの障
壁があるため期待したような展開ができていないが、粘り強くお願いを継続し
ている。

③ 京都仏教会

寺院での募金は 2019 年 3 月に終了するが、結果に期待している。

④ クラウドファンディング

目標額は 300 万円であったが、結果は 20 万円であった。更に別のクラウドフ
ァンディングを検討している。

⑤ ロータリークラブ、ライオンズクラブ

京都市内のライオンズクラブ、ロータリークラブ数十カ所に直接郵送でお願い
した。

⑥ マスコミでの広報のお願い

NHK 以外に中国新聞、京都新聞、毎日新聞、朝日新聞などが募金活動を記事と
して掲載して下さった。

2019 年 2 月末時点での寄付金受付総額は以下の通りである。（OM とは元寮生）

① 個人寄附（OM）：	14,803,338 円（遺贈を含む）
② 個人寄附：	4,787,000 円
③ 企業・団体：	2,650,000 円
合計：	22,240,338 円

3. 募金活動委員体制

現在、毎月の募金委員会に定例出席のメンバーは、内海理事長以下6名であり、全員60歳以上の高齢者で活動パワーには懸念が残るだけでなく、現在は募金活動委員が建築改修関係も担当している。今後、工事着工時には担当体制の見直しが必要となる。

京都国際学生の家が存在、活動意義、耐震・改修の必要性などを多くの市民や企業の方々に認知していただき、必要な経費を調達するためには現在の活動メンバーの倍以上の人数が必要と考える。活動開始以来、賛同、参加されるメンバーは徐々に増えつつあるが、様々な分野で参加協力をお願いするためには、募金活動メンバーの増強をも必要と考える。現在のHdBの理事、評議員などの役員、関係者はもとより、1千名に達するOMの方々の参加、学業多忙な中ではあるが現役寮生にも部分的参加をお願いしたい。

4. 計画の見直しと新募金活動

当初計画では本館改修（半分の学生が残ったままで、1年掛かりで工事予定）及び研究者棟新設を同時に行なう予定だったが、寄付による資金調達が進まない状況から工事内容を再検討し、計画を2期に分割して推進することにした（2018年12月7日理事会決定）。

- 1) 本館棟：第1期改修工事として、耐震、最低限のインフラ（給排水、ガス、電気）設備および工期の再検討を行った結果、再見積額9千万円に対して3千万円不足しており、今後の寄付活動などで充当することになった。工事期間は最初の1年間から2020年4月から8月までの5ヶ月間に短縮するが、寮生及び研究者、ハウスペアレント、事務員をも含めて全員が退寮して工事を行なう予定となった。但し、この決断には工事のために退寮を余儀なくされた学生がどの程度再入寮してくれるのか、学寮の伝統が継続できるかという憂慮する問題を抱えている。
- 2) 研究者棟：第2期新築工事として1億円を募金活動で調達し、第1期の耐震・改修工事後に行うが、時期は未定。但し現棟は継続使用できないため1期工事時に取り壊す予定である。

Ⅲ. 2019年度（2019.4～2020.3）の募金活動計画

当初の募金目標の達成がほど遠くなったが、建物の耐震強度の補強を遅らせる訳にはいかず、最低限の耐震補強、インフラの整備を主とした本館の改修工事を第1期工事とし、研究者棟（研究者用宿舎）新設を第2期工事とする基本方針にのっとり募金委員会としては、第1期工事の3千万円不足分の募金活動を2019年度の目標として活動することにした。それに伴い募金趣意書も新しく第1期工事と第2期工事に分けて作成することとした。（2019年募金活動としての第1期工事・趣意書は7頁参照）

IV. 今後の課題

HdB の今後 50 年、100 年の存続のためには、借地権を明確にし、寮費で建築物等の償却も含めた長期的予算計画を立てて運営する自助努力が何よりも必要であろう。加えて社会の善意を求めるならば、京都国際学生の家が国際、社会、将来に対する意義について幅広い広報活動を行い、支援団体・支援者を確保していくことが必須であるが、当面 2019 年、2020 年は、この新しい計画に沿って募金活動を継続していく。

卒寮した OM は累積約千人となるが、既に亡くなった OM も数十人を超え、行方不明者も多い。しかも 4～500 人ほどの OM しか連絡が取れていない状況は非常に残念であり、この大改修を機会に連絡が取れていない OM とも連絡をつけ、第 1 回の OM 会を本年 6 月 8 日（土）1 時より楽友会館にて、開催し、OM 会を結成したいと考えている。講師は、OM でハウスファーマーもされた戸口田淳也氏（京都大学ウイルス・再生医科学研究所/iPS 細胞研究所 教授/副所長）に、「HdB から iPS 細胞との出会いまで」について、話題提供をお願いしている。講演会は一般にも開放する予定である。

既に OM 達の寄附あるが更に増やして 1 人 5 万円を目安に、ご寄付をお願いする予定である。300 人の OM に賛同していただき 1,000 万円～1,500 万円を集めることを目標としている。

以上 2017 年度から 2019 年度に向けた募金活動の経過、展望であるが、幸い、募金活動を通し、NHK、毎日新聞などマスコミ関係者に本件の主旨を理解して頂き、広報活動が広がってきており、継続した募金活動の必要性も高まっている。次ページに今年度掲載された記事を載せておく。つい最近の 2019 年 2 月 5 日には新しい募金活動の趣旨について、NHK が放送して下さったことは有り難いことである。

2018年(平成30年)6月2日 土曜日

福井

桑原

信名

左京・京都国際学生の家 留学生支え半世紀

改築・改修に協力して

留学生寮の草分けとして1965年に開設され、国内外の学生が共に暮らす「京都国際学生の家」(京都市左京区)が、老朽化した建物の改築・改修費を集める募金活動を行っている。この春からは、京都仏教会の協力で市内の3寺院に募金箱を設置、市民や観光客の協力も募っている。



国際学生の家と改修された寮舎の前の様子。左から右へ、国際学生と改修した寮舎の様子。

仏教会も募金箱設置 広く呼び掛け

開設から半世紀以上たると、建物の老朽化が著しくなるなか、教団内には耐震基準を下回っているとも判明。学生が暮らす本館と、研究者向けの宿舎施設の両方の耐震補強・建て替えなどには計り難い十億円が必要という。

しかし、土壌が脆弱のため、金庫間からの借り入れは難しく、理事や寮生が中心となって募金委員会を結成し、民間企業や団体に協力を呼びかけている。

その一環で理事らが京都仏

教会に協力を依頼したところ、同会が後援。清水寺(東山区)、金剛寺(北区)、銀閣寺(左京区)に募金箱が設置された。

寮に暮らす大川夏樹さん(21)、岡田明日香さん(21)、インド出身のメー・エー・バールさん(28)は「寮生は多様な人間関係の場をはげめたい。寮をやり続けられるよう、必要な資金を集められるまで全員で頑張りたい」と話している。

(大田孝子)



国際学生の家と改修された寮舎の様子。左から右へ、国際学生と改修した寮舎の様子。

異文化共生の家 危機

京都・留学生寮の先駆け

半世紀前に開設され、1000人を超す国内外の若者を送り出した「京都国際学生の家」(京都市左京区)が存続の危機にある。現在は各大学にある留学生寮の先駆けで、学生の街・京都の象徴的存在だが、老朽化で耐震改築などに約2億5000万円かかることが判明。留学生らは「京都で暮る場所はない」と。運営を続けるのは「難しい」と支援を訴える。

寮は京都大近くであり、地下1階建て。同窓社大で教えていたスイス出身の故ウエルナー・コラー牧師が独断し、スイスと日本で寄付を募って1965年に建設された。当時は東西冷戦下で、大戦の記憶も色濃いつ時代。国も民族も文化も異なる若者の相互理解を目指した。

ただ、「共生」という理念は簡単には実現しない。開設時の入寮生で京都大名誉教授の内海博司さん(77)は「当時、ベトナム戦争への賛否を巡って寮生の間で論争が起きた。インドの学生がカーースト制度を論議にトイレ掃除を拒否して批判されたこともある」と振り返る。

そんな渦を埋めるのは「同じ釜の飯を食うこと」。月2回、金曜の夕食を交代で作り、全国で食卓を囲む

「コモンミール」は設立当初からの伝統だ。性的少数者の寮生の存在を知って自室にもったイスラム圏の学生は、食事を共にすることで相手の価値観を受け入れた。

単立した寮生は81カ国・地域の計1003人。現在は12カ国・地域の18人と日本人13人の計31人が暮らす。立派な大4年、大川夏海さん(21)は「まず他者を考えて行動するようになった」と言い、京都大大学院生でオランダ人のステフ・パン・デル・ストライクさん(26)は「ここは住む場所だけではなく「コミュニティ」と話す。

ただ、資金繰りは年々厳しくなっている。研究者への別館の短期滞在が収入の柱だったが、95年の阪神大震災で壊れにひびが入り、一部が使えなくなった。99年

国境・宗教も超え半世紀 耐震改築2.5億円



④「京都国際学生の家」本館の玄関前で寮生が手作りした夕食を囲む「コモンミール」。長く続く恒例行事だ。いずれも京都市左京区で



にはスイスの教会組織が運営から撤退。2013年から耐震診断で本館は補強、別館は建て替えが必要と分かった。運営法人の積立金は3000万円しかない。寄付はまた1400万円程度という。寮を現在運営する公益財団法人で理事長を務める内(64歳)。

耐震願う 国際学生の家

ネットでも寄付募る



①耐震工事の資金を募っている京都「国際学生の家」②ラウンジで談笑する寮生たち③いすれも左京区船場院東町



1965年、当時は珍しかった国際学生寮としてオープンした「京都「国際学生の家」」（左京区）が老朽化し、耐震性の問題も抱えている。さまざまな国籍を持つ学生や研究員らが助け合い、時には意見をぶつけ合いながら生活してきた「家」を守ろうと今夏、クラウドファンディングでの資金集めが始まった。

多文化共生の歴史 これからも

国際学生の家には現在、日本人18人を含む13カ国34人が住む。開寮時に建てられた地上4階、地下1階建ての本館と、69年にできた地上2階建ての西館がある。

本館、西館とも耐震基準

を満たしていないことが2012年に判明。本館は全面的な補強工事が、西館は建て直しが必要と判断された。水道管がさびて詰まったり故障がゆがんですきま風が吹いたりもしており、古くなった多くの設備が改修を迫られている。

本館の耐震工事費だけでも約8千万円、設備改修や西館の建て替え費を合わせると、必要額は約2億5千万円にのぼる。

本館工事200万円不足

20年春の本館の工事開始をめざす。市内のお寺などに募金箱を置き、京都商工会議所にも協力を呼びかけ、これまでに集まったのは約2千万円。積立金などから約4千万円を出せることになったが、本館の耐震工事だけでもあと2千万円足りない。

「一緒に暮らすJAF、国や宗教など、色々な違いについて実感できる」と語るのは、1期生でいまは理事長を務める京大名誉教授の内海博司さん（77）だ。「違いを知った上で受け合

精神は、いまの時代ますます重要になっている。受け継いでいくためにも、何とか住み続けられる環境を整えなければ」

80カ国以上、1千人超の寮生を送り出した。戦争をしている国の寮生がいっぱあったり、役割分担でもめ事になったりすることもあったが、そのたびに話し合っ解決方法を探ってきた。国際情勢に感情を左右されながらも、多文化共生の歴史を紡いでいる。

韓国から留学し、京大に通う李東暉さん（29）は「ここは楽しく過ごしてきた記憶が詰まった京都の美家。5年後、10年後にも戻ってこられる、思い出の場所として残してほしい」と願う。国際学生の家は24日まで、朝日新聞社のクラウドファンディング「A-Port」(<https://a-port.asahi.com/projects/hdb-crowd>)で耐震工事の費用を募っている。一口1千円から5万円までの6コースあり、イベントへの招待などの返礼が受けられる。

（足立敬雄）

2020年4月から休寮

老朽化と財政難で存続の危機にある「京都国際学生の家」（京都市左京区）が、2020年4～8月に休寮し、改修と耐震補強を計るようになった。1986年開校、1000人超の国内外の若者を受け入れてきた留学先駆的存在で、年々5000万円以上の修繕費を要する。改修計画を立てていたが、寄付は3000万円にとどまり、今月の理事会で計画の縮小を決めた。一層への備えは持たないで、続けてほしいとの声にも後押しされた。と運営する公益財団法人の内海博司理事長は話す。

【関子】

寄付2000万円 目標下回る

募金は昨年10月に開始。当初の計画は、学生に生活を送ってもらいながら改修と補強を進め、研究者に短期費貸する強さを導き出すとした。だが、いったん全面に改装してもらったことで、雨を短縮し、別館は取り壊すにせよ、耐震工法や改修箇所も見直した。新しい計画の費用見積もりは概算で、4500万円。積立金3000万円に、法人の本財産1000万円も投入する。寄付は4000万円と設定し、着工までにさらに2000万円を募る。費額は月3万3000円、研究者向けは5

募金は継続 改修と耐震補強へ

万円余りだが、改修後はそれぞれ値上げし、本館の取り壊しを要する研究員向けの別館を増やす。しばらくは通寮を続けられると願うが、運営安定に欠かせない別館の建築費（今000万円）をどうするかは目算という。

これまでに集まった寄付金3000万円のうち半分は、東西交流学が専門だった村能明子・京都大名産教授（昨年9月に死去）から遺贈された。海外在住者を含め、卒業生からは計400万円が寄せられたという。

現在の寮生は、日本人1人、10万回・地域からの留学生10人。留学生だけの一般的な留学生寮とは異なり、日本の若者も含めた「共生」を掲げる寮は珍しい。内海理事長は「半世紀続くこの伝統を将来に引き継ぎたい。工事中は別の宿舎に移らねばならないことを承知しながら、学生にはぜひ入寮してもらい、寄付金も集めたい」と話す。来年3月の募集は例年通り行う予定。京都国際学生の家（075・771・3648）。

京都国際学生の家



開設から半世紀がたつ「京都国際学生の家」。改修の意向はさびびりしているが、移の入れ替えだけであらうと内海博司理事長は言う
＝京都市左京区＝

村形明子先生について

山田 祐仁

(評議員、学寮運営委員長、1995 OM)

今般の学寮の改修に際して多額のご寄付をいただきました、故・村形明子先生についてご紹介いたします。

村形先生は、1941年に北海道の札幌で生まれ、東京都立新宿高等学校から東京大学教養学部へ入学されました。卒業後は AFS 奨学金を得てアメリカの Smith College へ渡り、1971年に George Washington University で Ph. D を取得されました。帰国後は京都国立博物館を経て 1978 年から京都大学助教授、1994 年からは教授を歴任され、2004 年に名誉教授になられました。ご専門は、比較文学・比較文化、文化交渉史でした。中でもフェノロサ研究では第一人者で、フェノロサ学会には設立から関わり、2003-09 年には学会長を務められました。

アーネスト・フェノロサ (Ernest F. Fenollosa 1853-1909) は、今から約 140 年前に東京帝国大学教授として来日したアメリカ人で、いわゆるお雇い外国人です。その傍ら、日本美術の研究・収集を熱心に行い、また国家神道の隆盛の裏で進んでいた廃仏毀釈の流れに一石を投じました。今年度の東京大学入学式での総長式辞でも大きく取り上げられています。

村形先生は、一次資料からフェノロサの足跡をつぶさに追い、『ハーヴァード大学ホートン・ライブラリー蔵フェノロサ資料』Ⅰ—Ⅲ (1982-87)、『フェノロサ文書集成—翻刻、翻訳、研究』上下巻 (2000-01)、『フェノロサ夫人の日本日記—京都へのハネムーン (1896)』 (2008) 等を表しています。私も法隆寺での調査に同行させていただいたことがあります。百年前のできごとを一日単位で、その場に居合わせたかのように記憶しておられ、驚くばかりでした。

そもそも先生と私の出会いは、私が工学部の 1 年生だった 1991 年、一般教養科目の一つとして受講した「文学」の授業でした。特別な関心で臨んだ訳ではなく、教室のドアを開けると受講生は私を入れて 3 名、出るに出られずそのまま受けることになったのでした。授業では Nishikigi (錦木) という英語で書かれた能の作品を読むほか、各人の研究テーマについての発表をしました。私が苦し紛れに児童文学をテーマに選ぶと、先生は大阪府立国際児童文学館の横川寿美子先生に宛てた紹介状を書いてくださりました。夏には平安神宮の薪能、正月には真如堂茶室での歌会始めと、それまで経験したことのない世界へもいざなってくださいました。

その後も、コンピュータの調子が悪いと言っては呼び出される一方、お茶会やお花見などにも招いてくださりました。2008年にはフェノロサ没後百周年記念事業のお手伝いなどもさせていただきました。福家俊明三井寺長吏の声明に始まり、能楽シテ方観世流片山清司氏（現・十世九郎右衛門）による仕舞「錦木」奉納、西島安則先生（京都大学総長・京都市立芸術大学学長など歴任、当学寮とも縁が深い）の講演と、村形先生の真っ直ぐなお人柄に魅せられた錚々たる方々のご協力を得ての、盛大な行事となりました。

数年前に、遺産の使途について託されました。その中の一つが京都「国際学生の家」でした。ご自身の留学体験が思い起こされたのでしょうか。まだずっと先の話だと思いつながら伺っていたのですが、急に体調を崩され、検査の結果は膵臓がん、あっという間にこの世を去って逝かれました。長年お一人暮らしの先生でしたが、最後は駆けつけたお弟子さん達に囲まれ、2017年9月5日、静かに息を引き取られました。

村形先生の御遺骨は、若き日にビゲロウ（William S. Bigelow, 1850-1926）研究で滞在したボストン沖のタカナック島への分骨が昨年夏に納められ、この Year Book が出来上がるのと前後して、滋賀県大津市の三井寺に納められていることと思います。また改修後の学寮には、村形先生の蔵書を収めた学習室が設置されると伺っております。

文科系の存在意義が言われる昨今、これから広く国際社会で活躍する皆様が、文化・芸術振興を立国の一つの柱として推進するに至らしめた明治期の人々と、その足跡を追い、後世に残すことに邁進された村形先生の偉業と思いに触れる機会となれば、望外の喜びです。



村形明子先生との 25 年余りのご縁と
京都「国際学生の家」事業へのご理解・
ご協力への感謝の意を表するとともに、
心からご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

【留学生問題について】

留学生と外国人労働者問題

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授、1965OM)

ヨーロッパで生まれ育った大学は、「学問の研究には国境はなく、学問の成果は人類の共有財産であり、特定の国のみが独占するべきものではない」という理念で支えられてきた。このような学問に対する態度は、大学の国際性を要求し、大学の教師は研究と教育の資質と能力さえあれば国籍を問う必要もなく、それを受ける学生の国籍もまた問題にならなかった。しかし国際的なグローバル化と共に、世界中の留学生数も著しく増えており、1975 年の 80 万人から 2008 年の 330 万人へと 4 倍近くになっている。

留学生の受け入れ理念については米国国際教育協会が掲げているように、①個人的キャリア形成、②外交戦略モデル、③国際理解モデル、④学術交流モデル、⑤パートナーシップ・モデル、⑥顧客モデル、⑦地球市民形成モデル等が掲げられている。日本の「留学生 30 万人計画」には⑥を除いて全て網羅されているようであるが、少子高齢化で労働力を補おうという本音を隠して、美辞麗句で飾られた留学生政策のように感じられる。

留学生とは一般的に（世界では）4 年制の大学や大学院の学生のことを指すが、2010 年に「出入国管理及び難民認定法」の改正（平成 21 年 7 月 15 日公布）により、平成 22 年 7 月 1 日付けで在留資格である「留学」と「就学」^{注1)}が、「留学」に一本化され、日本への留学のハードルが下げられた。これを悪用して、少子化で学生の定員割れを留学生で補おうとする大学も出て来た。2004 年に破たんした酒田短大も冰山の一角である。特に日本語学校などの場合に、その学生の一部が単純労働者の隠れ蓑になっていると云われている。留学生の在留カードには「就労は不可」となっている。しかし「資格外活動」の許可を取れば「アルバイトは可」である。出入国管理法（19 条）には、「資格外活動」として、2011 年までは原則的には週 14 時間以内または 1 日 4 時間以内であったのが 2 倍に増やされ、週 28 時間まで（夏休みなど長期休暇中は 1 日 8 時間、週 40 時間まで）アルバイトが可能になった。アメリカやイギリスでは「学生ビザ」ではアルバイトは原則禁止で、見つければ逮捕される。しかし日本では「学びながら働ける」というのが売りである。学ぶためではなくお金を稼ぐために留学する若者を受け入れるザル法になっている。若者にとっても可哀想だし、世界の恥となる制度である。

2014年7月に「留学生30万人計画の実現に向けた留学生の住環境支援の在り方に関する検討会」の報告書が出たが、留学生の宿舍の現状等には、外国人留学生約14万人のうち約4分の1（23%）が公的宿舍に入居しており、約4分の3（77%）が民間宿舍・アパート等に入居している。そのため多くの留学生にとって、留学後、宿舍等を探すことが大変である状況にあり、大学からも受入留学生を増やすために国に主に要望したいこととして、「外国人留学生のための宿舍の整備のための予算」がかかっている。しかし、2017年度（5月1日現在）になっても、留学生数188,384人に対して、公的宿舍入居留学生数は41,279人でたった21.9%であり、残り民間宿舍・アパート等が78.1%である。公的宿舍の内、大学が設置している留学生宿舍が30,410人で16.1%であり、我が(公財)京都「国際学生の家」のような公益法人等が設置する留学生宿舍に5,001人で2.7%、学校が設置する一般学生寮に5,868人で3.1%となっている。依然として留学生の宿舍環境は改善されていない。

そのような中で、大学の国際的な学びの環境作りが求められおり、その一つとして日本人学生と留学生が共に生活をする混住型学生宿舍が、グローバル人材を育成する場として注目されている。2014年度の「スーパーグローバル大学創成支援事業」(文部科学省)の構想調書には、「混住型学生宿舍の有無」を記載する欄もあり、混住型学生宿舍への関心が高まっている。今回「スーパーグローバル大学創成支援事業」に採択された旧帝大を含む37大学の構想調書においても、ほぼ全大学が、「混住型学生宿舍の新設」、「既存の留学生宿舍の混住型への転換」、「既存の混住寮の定員数の拡大」の3つのいずれかを計画案として挙げている。そういう意味で、半世紀も前に設立された日本最初の混住型学生宿舍である(公財)京都「国際学生の家」の先見性を誇らしく感じると共に、殆ど知名度が無い本学寮の意義を広く伝え、更なる存続への努力を続けたいと考えている。

2010年の「出入国管理及び難民認定法」の改正により、2017年6月末の留学生数は291,227人となり、2012年末の180,919人より10万人以上の増加があり「留学生30万人計画」の目標も間もなく達成するだろう。この留学生の増加は国籍による変化として現れている。中国からの留学生数は最も多いが、2012年に113,980人が2017年6月末で114,974人と、この5年で1,000人ほどの増加でしかない。一方急増しているのはベトナムとネパールからの留学生である。2012年末ベトナムからの留学生は8,811人、ネパールからの留学生は4,793人であったが、2017年6月末にはベトナムからの留学生は8倍の69,585人、ネパールからの留学生は5倍増の24,828人となっている。しかし大学ではなく日本語学校の留学生としての急増である。

日本学生支援機構の調査では、2017年に大学の学部在籍している学生が77,546人、大学院に在籍している学生が46,373人であるのに対し、日本語教育機関に在籍している留学生は大学と殆ど同じの78,658人である。つまり留学生全体の3割が日本語学校の学生である。日本語学校の留学生の急増と人手不足が重なり、「留学生の単純労働者化」が問題になっている。例えば2018年6月6日の西日本新聞によれば、福岡市内の弁当工場で働く留学生の数は200人近くにのぼり、その多くは学費や幹旋料を支

払うために 100 万円単位の借金をするため、日本人の時給より 300 円安くてもバイトに明け暮れ、中にはバイトを掛け持ちしている人もいるとのことである。東京周辺のコンビニや飲食店では、留学生のアルバイトが無ければ成り立たないそうである。2018 年 8 月で、全国のコンビニで働く外国人数は大手 3 社（セブンイレブン、ファミリーマート、ローソン）だけで 5 万人を超えている。例えばセブンイレブンだけで 3 万人を超え、従業員の外国人比率は 7.9%となっている。

日本政府は少子高齢化・人口減少・人手不足が深刻化するにも関わらず「移民」は受け入れないとしている。自民党の「移民」の定義は、「入国の時点でいわゆる永住権を有する者」である。この見解に沿って、政府、官僚、企業やマスコミが一丸となって「移民」でないと国民を誤魔化して、多くの外国人労働者を受け入れている。しかし、今では世界第 4 位の「隠れ移民大国」であり、知らないのは日本国民だけである。OECD(経済協力開発機構)は統計を取る上で、「1 年以上外国に移住している人」を移民 (immigration) と定義している^{注2)}。それによると 2015 年の 1 年間に日本に流入した「実質移民」である外国人数は約 39 万人になっている。現在、日本で暮らす外国人数は約 264 万人（2018 年 6 月末時点の法務省の在留外国人統計）である。永住者が約 76 万人、特別永住者が約 33 万人、留学生が 32 万人、技能実習生が約 29 万人、技術・人文知識・国際業務が約 21 万人、日系人など定住者が約 18 万人などである。なお、2016 年から新設された在留資格としての「介護」を取得している人々は 177 人のみである^{注3)}。都道府県別には、東京が約 56 万人、愛知県が約 25 万人、大阪が約 23 万人、神奈川県が 21 万人、埼玉県 17 万人と続いている。因みに京都府は 11 位で約 6 万人である。

更に本来労働者でないはずの外国人（技能実習生と留学生）が外国人労働者の 4 割を占めていることも知られていない。「技能実習」とは名ばかりで、日本人の働き手が足りない農業や建設現場などで、安価な労働者として使われている。薄給と過酷な労働環境で失踪し、行方不明になっている実習生が年間 7 千人にもなっている。2010 年には、国連が外国人研修・技能実習制度を「搾取的で安価な労働力を供給し、奴隷的状况にまで発展している場合さえある。廃止すべき」と指摘をしたが、改善されていない。「外国人技能実習生問題弁護士連絡会」（実習生弁護）は、技能実習制度は開発途上国への国際貢献を偽装した労働者受け入れ制度だと批判している。

今国会で新閣僚達をつるし上げることに専念している内に、人手不足解消のため新しい在留資格を創設し、単純労働を含む外国人労働者の受け入れを拡大する「出入国管理法改正案」を閣議決定した（2018 年 12 月 2 日）。大学教授や弁護士など高度な専門人材に限っていた従来の受け入れ政策から、単純労働分野での就労を認める法案である。政府は今国会で改正案を成立させ、来年 4 月から運用したい考えである。

改正案は、一定の知識・経験を必要とする「特定技能 1 号」と熟練した技能が必要な「2 号」の在留資格を新設する。1 号は在留期限が通算 5 年で家族の帯同を認めないが、2 号は配偶者と子供の帯同を認め、条件を満たせば永住にも道が開ける。受け入れは人手不足が深刻化している分野に限定し、現在、介護や建設、農業など 14 業種

が検討されている^{注4)}。改正案には受け入れる業種や人数などを明記しておらず、法案成立後に運用方針を定める。企業に対しては日本人と同等以上の報酬水準を求めている。与党内からは「移民政策につながる」との意見や受け入れ態勢が整っていないことへの懸念があるため、法律の施行から3年後に制度の見直しを行う規定を盛り込むそうである。政府は併せて、法務省の入国管理局を「出入国在留管理庁」に格上げするための「法務省設置法の改正案」も閣議決定した。増加が見込まれる外国人の出入国の審査や、在留管理を強化するそうである。そして法務省が「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策（検討の方向性）」^{注5)}の検討を始めた。これが「社会統合政策」^{注6)}を目指しているのであれば素晴らしいと思うのだが？

今回の入管法改正による単純労働者受け入れを「移民政策」と定義して、「社会統合政策」を実施すべきである。そして彼らが長く日本に定住して活躍できるような社会を目指さないと日本で基本技術を学んで、それが日本に根付かなければ日本に取って大きな損失になると思われる。日本の年金制度は、若い人達が働いての税金で賄われており、人手不足はAIロボットで可能と考えるのはお門違いである。ロボットは税金を払ってはくれない。或いは観光客が多く来ることは良いが彼らが落とすお金も年金には役立たない。欧州は現日本政府と同様に、外国人を一時的な労働者と捉えて定住を考えての言語教育を科さなかったことによる住民と移民との間に意思疎通の壁が出来た。この失敗を深く反省して600時間の語学教育を義務づけている。韓国も最長415時間の研修がある。我々は欧州の失敗を生かすことを考えねばならない。そもそも日本の歴史を振り返ると多くの移民（北から、西から、南から）が日本列島に来て、原日本人を形成したことを忘れてはならない。

また移民の受け入れには「コスト」ばかりでなく、安全保障にも影響する。日本に滞在する外国人で最も多い中国人は約74万人を突破し、外国人労働者の約3割を占めている。しかし、2010年7月にできた中国の「国防動員法」によれば、中国人は有事の際に中国政府の指揮下に動員されることが義務づけられている。またドイツでは、移民の流入時期と比例して犯罪率が増加、社会保障費が1年で73%に増加した等の問題が噴出し、移民政策の反対派が急増している。

現政権も日本社会も、「人口減少社会」と「外国人労働者」の問題に対して、場当たりの対応しかやって来なかったことを深く反省し、将来引き起こされる問題を直視して、早く手を打つ必要がある。例えば、90年の入管法改正で住民税や国保税の徴収が不備なまま受け入れた日系ブラジル人は既に19万人を超えており、働き盛りの30代で日本に来た者は早くも定年間近となっている。彼らが無年金で職を失うと生活保護に行かざるをえない。

まずは国連が指摘するような日本の極悪な働く環境の改善や、日本で生活するために必須の日本語教育を科すような「社会統合政策」を施行する社会制度や法を整備すべきである。我々国民は、日本が魅力的で素晴らしい国だとして、優秀な外国人が喜んで日本に来て働けるような「共生社会」の構築に、真剣に取り組む必要がある。

注1：教育機関の形態により「留学」と「就学」の在留資格に区分され、大学等高等教育機関で教育を受ける活動を「留学」、高等学校、専修学校(一般課程、高等課程)及び各種学校等において教育を受ける活動を「就学」として在留管理が行われていた。

注2：国際移民の正式な法的定義はありませんが、多くの専門家は、移住の理由や法的地位に関係なく、定住国を変更した人々を国際移民とみなすことに同意している。3 カ月から 12 カ月間の移動を短期的または一時的移民、1 年以上にわたる居住国の変更を長期的または恒久移民と呼んで区別するのが一般的である（国連経済社会局）。

注3：ただし、外国人労働者全般でいえば、多様な在留資格で「社会保険、社会福祉、介護事業」に従事している人々の数は 13,536 名ほどにのぼる。厚生労働省 HP「外国人雇用状況の届け出状況」参照。

<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000192073.html>

注4：特定技能1号は14業種だが、2号については、国会での議論の過程で家族帯同などが「移民につながる」という批判のために、大幅に削られて、当面、2業種だけとなった。たとえば以下の記事を参照。https://www.jiji.com/jc/graphics?p=ve_pol_seisaku-houmushihou20181219j-04-w460

注5：www.moj.go.jp/content/001269923.pdf

注6：「社会統合政策」とは、外国人の日本社会への「同化」政策ではない。外国人の権利を保障するとともに外国人に義務も果たしてもらうこと、また外国人の文化的多様性を維持するとともに日本社会・地域社会の構成員としての責任も分担してもらうことを目指す政策。それには日本語教育の充実、相談体制の整備、医療・保健・福祉サービスの整備と提供、住環境の整備、子供の就学問題、労働環境整備、社会保障制度の整備、受入れ企業への支援・監督、語学・技術水準確認のための試験体制の設置などなど、列挙しきれないほどの項目が含まれる。井口泰「東アジア経済統合下の外国人労働者受入れ政策」社会政策学会編『社会政策』7(2): 9-26（2015）

日本語教育の必要性と課題－日本語指導の体験をもとに－

村田 翼夫

(HdB 理事、Year Book 編集委員長、筑波大学名誉教授)

1. 外国人受け入れ者の増加政策

改正入管難民法が昨年の 12 月に成立し、今年（2019 年）の 4 月から実施予定である。それにより、日本政府は外国人受け入れ数を増加させる計画である。これから 5 年間で新たに約 34 万人の外国人を受け入れようとしている。主な仕事は、看護業、外食業、建設業、農業などである。従来、技能実習生を受け入れていたが、技能実習生以外で働くことを希望する外国人は、日常会話程度の日本語の試験と技能試験に合格すれば新設の特定技能 1 号（技能労働者）として働くことが可能となる。この特定技能者は最長 5 年在留できる。家族の帯同は認められない。さらに高度な試験に合格すれば、熟練した技能を必要とする仕事、特定技能 2 号に就くことができる。家族の帯同も認められる。

外国人の受け入れに当たり、各自治体は各種の課題に取り組んでいる。読売新聞の全国自治体の首長アンケート調査によれば（2019 年 2 月 17 日号、6 面）、「多言語による地域情報の提供（41%）」と並んで「日本語学習などの支援（32%）」、「外国人と日本人が理解し合うための機会や場の提供（25%）」などがあがっている。外国人の子どもの教育について全国 7 割の自治体が課題ありと回答していた。最も多いのは、「ノウハウや個別指導の教員不足」、「日本語能力の不足で教科指導が困難」である。日本語学習の課題は把握されているが、実際には外国人の子どもや成人の日本語能力は不足している。

在留外国人約 256 万人のうち、国内における日本語学習者数は約 24 万人（平成 29 年 11 月）といわれる（文化庁「平成 30 年度 我が国の文化政策」67 頁）。平成 24 年には 14 万人だったので、その年より約 10 万人増えている。一方、日本語教員数は、平成 24 年に 3 万 4 千人であったが、平成 29 年に 3 万人 9 千人となった。わずか 5 千人しか増えていない。

2. 日本語指導の体験

外国へ最初に日本語指導に赴いたのは、京都大学で助手をしていた 1968 年 6 月から 1970 年 3 月までの期間におけるマレーシアのマラヤ大学であった。その頃は、まだ日本政府の教員派遣により海外の大学で日本語を教えるケースはなく最初の試みであった。私は外務省文化第 2 課より派遣された。当時、まだ国際交流基金は設立されていなかった。日本語教科書も少なく、ICU 発行のものを使用した。マラヤ大学に着いた

とき、「授業は週3時間です」と言われ少なくても有難いと思った。ところが、実際にはチューターリングという個人指導の時間があり、講義のあと少人数に分けて追加指導しなければならなかった。授業は週に6～10時間に及んだ。

筑波大学で1980年より外国人教員研修留学生プログラムのお世話をしていた時にタイへの日本語教員派遣が始まった。帰国したタイのカセサート大学附属中等学校の教員が、日本語能力の不足を理由に筑波大学学生の日本語指導補助を求めてきた。1987年頃である。約1ヶ月間、ホームステイを条件に中高校生を対象に日本語指導を行い始め、すでに30年以上続いている。主に、人間学類、生物学類、国際学類の学部生を毎年1～2月に3～8人を派遣した。このプログラムは好評で、同中等学校の日本語レベルは向上し、有名大学の入試においてよい成績を上げるようになり、同学校教員から強く継続を希望された。参加した学生の間でも評判で「異文化体験ができる」、「英語も上手になる」という感想が多かった。筑波大学にはニューヨーク大学オズウィー校へ留学する制度があり、成績の良い学生には奨学金が提供された。その留学プログラムに応募する者は、タイへ日本語指導に行った学生が最も多くなり話題になっていた。タイにおける日本語指導の経験は、国際交流、外国留学への動機を高める契機にもなっていた。同プログラムは、2008年に文部科学省より「国際教育賞」を受けた。このプログラムは現在も続いている。

筆者が大阪成蹊大学へ移ってからはタイのチュラロンコン大学附属中等学校（2年間）、また京都女子大学で勤務するようになってからチェンマイ大学附属中等学校へ学部学生を日本語指導のため派遣（7年間）した。いずれのケースも学生の滞在期間は1～3週間程度で無料のホームステイが提供された。チュラロンコン大学附属校には、派遣学生は3人程度であったが、チェンマイ大学附属校には3～8人の学生が出向いた。日本語を学習したチェンマイ大学附属高校の卒業生で大分県にある「立命館アジア太平洋大学」へ留学する者もすでに4人も現れた。

チェンマイでは、その他、ハウスで一緒に共同生活をしたパイブーン氏（Dr. Paiboon Suthasupa）の協力を得て、2010年にチェンマイ市郊外にある農村に日本語を教える「ラーニングセンター」を設立した。当初、山地民の子どもが就職の機会を得やすいように日本語指導を行うねらいであった。しかし、彼らが居住する寮の管理者が、日本語を学習する夕方に出発することを禁じていて出席してもらえなかった。それで止むを得ず貧しい農民の子ども（タイ系、一部ミャンマー労働者の子ども）を対象とした。初めの頃は、中高校生が多かったが、3年後からは小学生が多くなった。最初の年は6ヶ月、次の年は3ヶ月、後は1～2ヶ月に止まった。児童生徒は予想以上に日本語、日本の遊びに興味を持ち一生懸命勉強してくれるのでやり甲斐を感じた。高校生の中には、日本企業で働くことを目標にする生徒もいた。

2016年にチェンマイ大学附属高校の校長が交代すると、国際交流、あるいは中国語を重視し日本語学習に関心が薄れ、日本語指導は中止となった。代わって、地域総合大学（ラチャパット大学）チェンマイ校や私立高校（テボデン・ハイスクール）へ日本語を教えに行った。地域総合大学には、日本語科があり学生の日本語レベルは相当

高かった。訓練を受けていない京女生は指導に苦勞した。しかし、同大学卒業生で日本留学してくる者も多いので、指導した京女生は帰国後もスマホで連絡し、日本で再会しているケースもみられる。

2017年、2018年には、チェンマイの国立職業カレッジにおける日本語指導の依頼を受け、8月に約1か月間日本語指導を行った。その時には、京都女子大学ばかりでなく、龍谷大学、京都産業大学、玉川大学、明治学院大学等の学生も加わり、総勢約20人となった。男子学生も参加し活気が出て学生相互の工夫も見られた。このカレッジには観光科があり、立派なホテルを所有していた。指導学生たちにこのホテルの部屋が無料で提供され彼らは感謝していた。折角、学生たちや教員も日本語指導に熱が入り盛り上がっていたのに、2018年10月に校長が代わり、日本語指導プログラムは中止となった。新校長は、日本語よりも中国語に力を入れたいという方針の結果であった。

2018年の8月には、元タイ教育省職業教育局長であった Ms. Puttachard Saphalucksana をお願いしてバンコク、アユタヤにある私立職業カレッジ (Private Business Administration and Technological College) 3校を紹介してもらった。彼女は同カレッジの国際部長であった。これらのカレッジにもチェンマイの職業カレッジの時と同様な大学から約20人の学生が参加した。ホテルはなかったが、学生寮に無料で宿泊させてもらった。いずれのカレッジでも日本語を教育するのは初めてで歓迎された。しかし、中国語の教育はすでに行われていた。日本語指導は中国語に比べ一歩遅れを取っている。

28頁に「ラーニングセンター」、「私立職業カレッジ」における記念写真を掲載しておく。

3. 日本語教育の課題

2011年8月24日にタイ日工業大学を訪問した。同大学は、2006年にバンコクに創設された。日本のものづくり技術を教育することを目的としている。学長の Dr. Krisada Visavateeranon は、初代学長で京都大学において工学の博士号を取得された。ハウスに1970年に入寮されている。彼にお会いして大学の様子やタイの教育について話を聞いた。彼が最も強調したのは、日本政府や日本の大学は日本語・日本文化の教育にもっと力を入れるべきという点であった。同大学では入試に日本語を課している。中学校、高等学校で日本語を教えている学校は多くない。前述のようにチェンマイ、バンコク、アユタヤの中等学校やカレッジでも日本語に比べ中国語を重視しつつある。日本語を学習している児童生徒が少ない（高校生は5,000人）ので、タイ日工業大学を受験しようとする生徒は増えないということである。もっとタイの小学校、中等学校、並びにカレッジや大学で日本語・日本文化を学習するように働きかけてほしい。日本語教員をもっと増やすように工夫すべきであるという強い主張であった。これは、タイのみならず他の国々にも当てはまることではないだろうか。

1の個所で日本語教員が増えていないという問題を指摘したが、海外の日本語事業

（日本語教員派遣、日本語研修や教材整備など）を担当している国際交流基金の予算を見てみる。海外日本語事業費は、平成 17 年に 36 億 3 百万円であったが、平成 22 年は 45 億 2 千 8 百万円に増えた。しかし、平成 26 年に 49 億 6 千万円とわずかしこ増えていない。

外国人の受け入れ数が増えれば、当然、国内における日本語教育を拡充しなければならなくなる。同時に、外国人が日本へ来る前に本国において日本語を少しでも習得し、日本文化について学んでおいてもらうことが望ましい。そうした日本語・日本文化事業をもっと積極的に展開すべきであろう。中国語の普及に圧倒されるようでは心もとない。

前述の文化庁の平成 30 年度白書によれば、日本語教育の課題として「生活者としての外国人」に対する日本語教育の内容・方法の充実、また日本語教育人材の養成・研修を日本語教師、日本語教育コーディネーター、日本語学習支援者に分けて拡充するとしている。それらの方策はいずれも国内における実施を想定し、外国における施策が考慮されていない。

国内における日本語教育の場合でも、教室だけで学ぶばかりでなく具体的な生活を通して学ぶ方が身につけやすいであろう。そういう観点からも、京都「国際学生の家」のように外国人が日本人と一緒に共同生活送りつつ学ぶ環境は、日本語学習にとってもきわめて望ましい方法と考えられる。

日本語教員を増やし日本語教育の機会を拡充する、また生活を通して日本語を学ぶ環境を整える。それも国内だけでなく、海外においても実施できるように工夫することが大きな課題であろう。



チェンマイの「ラーニングセンター」における授業風景（2017年8月）



「アユタヤ職業カレッジ」における習字の作品（2018年8月）



バンコクの「タクシナ職業カレッジ」の学生による観光案内（2018年8月）

Health and Wellbeing of Academic Visitors in Kyoto

Adriana Hidding

House Parent

Medical Interpreter Kyoto Prefectural University of Medicine

Lecturer Kyoto Notre Dame University

Facing health issues can be challenging for anyone. Let alone when you are far away from home. As a medical interpreter I often meet foreign residents who in addition to their medical worries feel lost in Japan.

The number of foreign researchers and students has increased dramatically in Kyoto. Many have positive experiences in Japan and will share this along their path in life. However there are researchers and students who feel isolated, and lack guidance in their everyday life in Japan. When the latter group faces difficulties in accustoming to Japan, or has health issues, loneliness and stress can add up to their problems.

When I first came to Kyoto and HdB as an exchange student, it was not long before I was taken down by food poisoning. I did not feel able to get out of my room, so I took my phone and called my neighbor next door, “I am sick, please get me something to drink”. About 15 minutes later in a germ phobic way my door was opened, two bottles of Pocari Sweat entered and the door was quickly closed.

It is a very simple example, of a small favor. But how would I have felt if I would not have known my neighbor, or if I had felt that there was not anybody around that I could ask for such a favor? What if there would not have been someone to keep me from getting dehydrated? I might have ended up going to a hospital not just sick, but depressed and disillusioned on top.

Loneliness and mental difficulties are not the most popular topics, especially among young people who may feel that they ought to be happy. Too often it is mistaken to be a problem just of older people, who lost a partner or have no relatives nearby. In many places taboos furthermore still exist regarding mental health. When contacting home, the urge not to have friends and family worry can be strong, feelings of shame to admit to feeling troubled, it all may create hurdles that keep people from consulting each other.

When I first came to Kyoto I was lucky enough to get the opportunity to find a home away from home at HdB. However most exchange students, and researchers do not get such a strong support network when they arrive somewhere where they do not know anyone yet. They do not have the opportunity to get to know their neighbor in an informal way.

Especially in the case of health issues it can be problematic not to have a support network, as mental and physical problems can aggravate each other. Difficulties in finding a doctor, misunderstandings, unfamiliarity as to what to expect when you go to the doctor, no knowledge on why things are done in the way they are, it can all add to feelings of frustration and helplessness.

Despite many kind initiatives it is furthermore still hard to navigate the Japanese medical world without strong knowledge of Japanese. Some major hospitals still go without a medical interpreter. Leaving patients without guidance in a medical system with a heavy administrative load. Or even not having a sufficient understanding of planned medical procedures.

Dedicated medical staff can in most cases help with easing symptoms. And as an interpreter I can assist in overcoming communication and cultural issues. I feel grateful to be in a position where I can be of some use. Yet I sometimes feel unable to give the support that is really needed. For loneliness and isolation are two problems, both hospitals and universities are not always designed for to deal with.

References

Meixuan Song, Stress Conditions and Mental Health Status of International Students Studying in Japan ‘Science Journal of Public Health, Volume 6, Issue 3, May 2018, pp: 100-105

Mizuho Aoki, Japan’s medical support system falls short amid influx of foreign tourists, residents. Aug 2, 2017 Japan Times.

多文化共生センターきょうと編 (2014) 『医療通訳』

私と京大農学研究科の留学生事情

秋津 元輝

(京都大学農学研究科教授、OM 1986)

このたび、依頼を受けて京都大学農学研究科／農学部留学生事情について情報提供することになった。私は2017年5月から、当農学研究科の国際交流担当の副研究科長を務めている。農学研究科／農学部の国際交流室の室長でもある。なので、世間的には留学生事情を語るに相応しく、客観的な状況を伝えることが常となるが、ここで事務方が調べたような報告をしてもつまらない。若干のデータを利用しながらも、私の実感も交えて最近の動向を紹介したい。

まずは、数字を使って説明しよう。表1はここ5年間の留学生数の推移を表したものである。最近の留学生の滞在は多様である。かつてなら、大学院や学部で正規生として在籍し、学士や修士、博士などの学位を取得するというのがほとんどであった。しかし今は、それにくわえて学位取得を目的とせず、短期で滞在して単位を取得したり、研究指導を受けたりする学生も増加しつつある。この表は毎年、5月時点で学籍を持っている留学生の数を示している。ここには、特別聴講学生や特別研究学生という3ヶ月から2年間ほど滞在する留学生、また短期交流学生という身分で短期研修のために滞在している留学生も含まれている。

表1 農学研究科／農学部の留学生数の変化

	2013 年	2014 年	2015 年	2016 年	2017 年
アジア	114	134	164	196	211
うち中国	55	62	71	84	82
うち韓国	17	20	20	22	21
うち台湾	5	5	8	15	22
うちインドネシア	12	15	27	29	31
アフリカ	5	3	7	12	8
中南米	4	2	2	3	3
欧州	0	1	1	5	7
北米	2	8	1	1	1
オセアニア	0	0	0	1	1
総計	125	148	175	218	231

表からわかるのは、やはりアジアからの留学生がほとんどであることだ。なかでも中国からの留学生が多いが、その比率は若干ながら減りつつある(2013年の48%から、

2017年の39%)。アジアでは、インドネシアや台湾からの留学生が近年になって増加してきた。現在、当農学研究科では、インドネシアのボゴール農科大学とバンドン工科大学、ガジャマダ大学、およびタイのカセサート大学と修士課程のダブルディグリー協定を結んでいる。昨年には、国立台湾大学とも修士課程のダブルディグリープログラムを締結した。ダブルディグリープログラムを選択した学生数は数名程度なので、表1のインドネシアや台湾からの学生数の増加はその他の身分によるものではあるが、ダブルディグリー協定の締結は関係が深まっていることのひとつの証である。たとえば昨年、インドネシアの大学を訪問する機会があったが、大学関係者は予算獲得などの理由からインドネシア国内での大学ランキングに敏感で、その順位を上げるために各大学が学術、国際化など面でしのぎを削っているという印象であった。インドネシアの大学との交流の深まりは、そもそも農学研究科のアジアとの関係が密であるという事情もあるが、インドネシア側の差し迫った事情もその一員であると察せられる。

アジア以外の地域からの留学生は比較するとそれほど多くはない。しかし、私が国際交流担当となって以降、たとえば欧州の大学との間でも交流協定締結が進み、単位取得を目的として半年から1年間滞在する学生が少しずつではあるが増加している。聞くところによると、フランスの大学では修士課程の期間に海外での単位取得やインターンを義務化する動きもあるという。そのため各大学が競って、学生が行き先として選択できるよう交流協定先を増やしたり、交流のパイプを太くしたりしている。フランスの高等研究教育機関であるモンペリエ・スパグロ (Montpellier SupAgro) とは、昨年に先方の要望に応じて協定に記す交流学生数を増やしたほどだ。私が間に入って締結した米国ケンタッキー大学との交流協定でも、こちらから学生を派遣するだけでなく、先方からも半年滞在の学生を受け入れた。ケンタッキー大学の知り合いの先生によると、かつて同大学の学生たちは米国内にいても世界がわかるという風潮であったが、最近では積極的に国外に目を向ける学生が増えてきたという。近々、ニュージーランドの大学とも農学研究科として学生交流協定を結ぶ予定である。

国際協力と関連した留学生の受入れもある。ABE イニシアティブと呼ばれる JICA の「アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ」を通じて日本政府の奨学金を得て、当研究科に留学してくる学生がいる。さらに、JICA には 'Innovative Asia' というプログラムもあり、アジア各国の学生を支援して日本で学ぶ機会を提供している。アフガニスタンの復興を支援する Peace Project (「未来への架け橋・中核人材育成プロジェクト」) による留学生も農学研究科で受け入れてきた。

というわけで、当農学研究科は国際交流が「好き」だ。フィールド研究で海外との関係を培ってきた分野や、国際交流が好きで留学生を多く引き受けている教員などが中心になっている。農学研究科は、京都大学の部局のなかでも工学研究科について留学生が多いようである。とくに関係の深い大学とは、京都大学全体の予算を獲得して大学間の交流シンポジウムを、毎年交互に開催地を移して開催している。昨年も、研究交流を目的として国立台湾大学、タイ・カセサート大学と合同シンポジウムが開催

された。私も役職柄というか、研究分野の関係から、そのような機会で総論的な講演を最初にするはめになったりする。

ところで、私の研究室には現在、7名の大学院留学生がいる。内訳は、中国から4名、台湾から2名、米国から1名である。その他に、英国のオックスフォード大学から、日本の新規参入農業者の研究ために来日した博士課程の院生を1年の期間で受け入れている。ちなみに日本人の院生は9人で、博士課程にも5人が在籍している。今に始まったことではないかもしれないが、かなりの頻度で留学希望の学生からメール連絡がやってくる。中国からに限らず、バングラデシュやインドネシアなどからもメールがくる。専門的な研究の準備度合いと真剣度を勘案して、セレクトして対応しているが、それでもボーッとしていると、留学生過多になりかねない。私の研究室の課題は、未来に向けた農と食システムについての研究である。このテーマは欧米でも研究が盛んであるというか、私自身が欧米の研究を参考にしながら進めてきたので、日本人、その他アジア系、欧米系をバランスよく受け入れて、留学生の力を借りながら、国際的視野を意識した研究室体制を築いていきたいと考えている。

Changes in student housing

Arno Suzuki

Senior lecturer / International student advisor

Graduate School and Faculty of Science, Kyoto University

University student housing has changed drastically over the last two decades. My first encounter with it was in the 1970s in California, USA, when I stayed at a dorm in a public polytechnic university. Most students there at that time were financially independent of parents, working part-time and paying their rent and tuition.

In the 1990s, when I went to the USA as a graduate student, I witnessed the last days for affordable student housing. There was family student housing for a prestigious land-grant university, which provided decent living conditions and a friendly community for less than half of market rent. About half of the residents were international students and their families. There I met many Chinese scholars who escaped from the Tiananmen incident as well as students from developing nations, single parents and other financially struggling students. Some Ph.D. students and postdocs were washing dishes at restaurants on the side to support their family. I worked part-time as a university-employed resident advisor for that family student housing, and I also served as a board member of the resident association that led the protest against the redevelopment that resulted in a considerable rent-hike. The reconstruction started in 1998 despite our resistance and petitions. The rent for the new apartments tripled and became even higher than the market rate or the standard salary for graduate assistants. It happened because the university did not subsidize student housing and the rent income had to cover the construction cost entirely (Suzuki 2012).

I had anticipated that the enormous rent-hike would leave the student housing empty, but to my surprise, it did not turn out that way. When I interviewed new residents in 2008, few complained, but they rather appreciated the safety, excellent community services and beautiful homes. A Chinese student who was receiving a generous scholarship from their home government said that they were content about the pleasant environment. A Korean student, who had been making over 80,000 USD annually as an engineer back home told me that poor people would not go to university, not to mention to study abroad, and therefore affordable student housing would not be necessary. Higher tuitions and rent have made domestic students more dependent on their parents or patrons, but the majority of students who are not from affluent families have to rely on hefty student loans (Suzuki 2014).

In EU countries, governments support most universities and the tuition for domestic students

are free or very low. Neoliberalism in higher education, however, is also rising; therefore, they look for fee-paying international students as an income source. Tuition for non-EU students is so high that only students who can afford are the target. Student housing, therefore, is expected to be more comfortable, convenient, safe, educational and characteristic. With the trend in universities of outsourcing their services more and more, many private companies were established to provide student housing. Nowadays, the student housing business attracts investors worldwide as low-risk high returns options.

In Japan, the government has been trying to provide housing as well as scholarships for only international students. Providing better-equipped housing for international students versus domestic ones is a tendency almost everywhere. Japan is, however, the only country to my best knowledge where international students can get a discount on rent and tuition. Some people in Japan may still retain the mindset of a “provider”, as Official Development Assistance (ODA) budget has been providing MEXT scholarship. We have to be aware, however, that Japan is no longer the wealthiest or most thriving country in Asia.

Housing for domestic students in Japan has changed as well. When I was living in Kyoto University’s women’s dormitory, an old wooden building with outdated facilities without air-conditioning, the rent was 400 yen per month. There were students with financial problems who needed such affordable housing. The dorm was demolished in 2017 and is supposed to turn into new buildings soon. The rent will be 25,000 yen per month. I do not hear much complaints or grievances about the rent increase, which is probably because low-income families decreased in this university. There are more financially struggling people now than in the 1980s, but poor children cannot afford to receive the primary and secondary education to make their way to competitive universities such as Kyoto.

We have to remind ourselves that student housing is no longer a mere form of financial aid. I am not saying this is right or wrong, but this is what is happening all around the world. Thoughtless charity would do only harm, but the extreme neoliberalism is surely breaching the equal opportunity for internationalization. The educational student housing for a reasonable rent on a non-profit basis, therefore, is becoming valuable evermore.

(日本語訳)

この 20 年間ほどの間に、学生宿舎の存在意義が大きく変わりました。私が初めて大学の寮に出会ったのは、1970 年代に米国カリフォルニアで公立工科大学の寮に泊まった時でしたが、その頃のアメリカ人学生は経済的に自立しており、親元を離れ、アルバイトをして家賃や学費を払っていました。

1990 年代に大学院生として再び米国で暮らしていたとき、いわゆる「家賃の安い学生寮」の終焉を見ました。それは著名な州立大学のためのファミリー向けの学生宿舎だったのですが、市中の相場の半分以下の家賃で、悪くない生活水準と安心して暮らせるコミュニティを提供していました。全世帯の半数近くは外国人留学生とその家族

で、天安門事件から逃げてきた中国人を始め、途上国からの留学生、シングルペアレントといった経済的に困難な学生が多数住んでいました。博士課程の院生やポスドクですら、夜は食堂で皿洗いをして家計を支えていたりしました。私は大学の非常勤職員としてその学生宿舎のレジデント・アドバイザーをしていたのですが、その一方で、宿舎の建替えと家賃の値上げに反対する住民連合の役員も務めていました。我々の反対運動や陳情にも拘らず 1998 年には再開発が始まり、新築アパートの家賃は従来の 3 倍にも跳ね上がり、近隣の相場や平均的な大学院生 T A や R A の給与をも上回る高値となりました。宿舎は財政的に大学から独立しているため、建設費や維持費を全て家賃収入で賄わなければならなかったためです (Suzuki 2012)。

そんな高い家賃では誰も住めなくなるだろうと思っていましたが、その予想は見事に外れ、新しい宿舎には空室ができないどころか、長い空き待ちの列すらできていました。2008 年に私が聞き取り調査を行った際には、高い家賃に不満を述べる人はほとんどおらず、新しい住民達は、むしろ小綺麗な建物、行き届いたサービス、安全な環境といったものを褒め称えました。本国から潤沢な奨学金を受けて留学して来ている中国人夫妻は「この住宅に大変満足している」と幸せそうに述べ、また故郷ではエンジニアとして年収 8 万ドル以上稼いでいたという韓国人大学院生は「貧しい人達は大学に行かないし、ましてや留学など絶対にしないから、安い家賃の寮なんて必要のないよ」と言い放ちました。地元のアメリカ人学生達も、高騰した学費や家賃のせいで親などの支援者に頼らざるを得なくなり、それができない中流以下の家庭の子供達は、多額の学生ローンを借り入れして何とか家賃を支払っていました (Suzuki 2014)。

一方 EU 圏においては、大学のほとんどが税金で運営されているため、国内学生の学費は無料か、そうでなくても非常に低額に抑えられています。しかしそこでも、高等教育をビジネスとして捉える「新自由主義」の圧力は起こっており、その結果、大学はその収入源として、授業料を全額徴収できる留学生に目をつけるようになりました。留学生とくに EU 圏以外から来た学生の授業料は高額なので、自然と裕福な学生が集まってくるようになります。そのため学生宿舎においても快適さ、便利さ、安全、教育効果、そして特色といったものがより重視されるようになりました。大学の学生サービス関連業務のアウトソーシングも進み、学生宿舎を提供する民間企業が次々と設立され、売り上げを伸ばしました。今日では、学生宿舎経営は、ローリスク・ハイリターンな事業として投資家から注目されるに至っています。

反対に日本では、政府は留学生ばかりを優遇し、潤沢な給付型奨学金と格安の宿舎を提供してきました。より高級な宿舎を外国人に提供しようとするのは世界共通の傾向です。しかしそれを公的負担によって格安で提供したり、留学生に対して学費を割引したりしている国は、私の知る限り世界中でも日本だけです。どうやら日本には、「おサイフ外交」的な感覚がどうしても抜けない方がいらっしゃるようです。文部科学省も「新たな財源を探さなければならない」とわかつてはいるものの、今なお「国費留学生」の奨学金や渡日費の財源を ODA (政府開発援助) 予算に頼っています (MEXT 2003, 2012)。そういった各種施策の影響なのか、日本はもはや経済大国でも

アジアのリーダーでもないことがいまだに理解できていない日本人が多いようです。

日本の国内学生向けの一般寮もすっかり様変わりしました。私が京都大学女子寮に住んでいた頃は、エアコンも新しい設備も何もない家賃 400 円の古い木造の寮を本当に必要としている貧しい学生が存在していました。その女子寮も 2017 年にとうとう解体され、新しい国際学生宿舎の建設が進んでいます。家賃が 25,000 円に上がると聞きましたが、それに対してあまり嘆息や苦情は聞こえてこないのはなぜでしょう。1980 年代に比べて日本の貧困層は増えているはずですが、大学受験の産業化に伴い、貧しい家庭の子供は京都大学など目指せないご時世になってしまったのでしょうか。

全世界的に見て、経済支援としての学生宿舎の必要性が小さくなってきたということは、それが良いか悪いかは別として、認識しておかなければならない現実です。思慮を欠いた「施し」が有害である一方、行き過ぎた新自由主義は平等な国際化の機会を確実に奪っています。非営利目的で教育効果の高い学生宿舎を適正な家賃で提供することは、以前にも増して価値あることでしょう。

References

Suzuki Arno (2012), 'Open Social Housing to Accommodate Diversity: A Case Study of The University Village Albany, California, USA, Before the Redevelopment', *Long Lasting Building in Urban Transformation*, pp. 608-617pp.

Suzuki Arno (2014), 'Lifestyle Adaptation in Multicultural Student Housing: Case Studies in Japan and in USA', *Architecture OTHERWHERE*, pp. 1035-1046pp.

MEXT scholarship websites (2003, 2012)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/03041101/008.htm (in Japanese)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/010/attach/1319355.htm (in Japanese)

アジアで広がる自然災害のリスクにどう対応すべきか ～新たな資源管理システムと日本の経験～

嘉田 良平

(1971 入寮、HdB 理事、四條畷学園大学教授、総合地球学研究所名誉教授)

自然災害に「想定外」の被害が頻繁に起きる中、治水対策においてこれで万全という方式が確立されている訳ではない。わが国では近年の洪水被害の経験から、もう一度伝統的な知恵を生かし、上流と下流間の連携によって水資源を管理しようという動きが注目されている。それはまさに、「森は海の恋人」という発想につながるのであるが、アジアの発展途上国においても、緑資源を活用した新たな流域連携の手法が模索されつつある。

こうした視点に立って、過去 5 年余り、私たちはインドネシア・スマトラ島最南部のランブン州においてランブン大学との共同研究を行ってきた。そのきっかけは、近年の自然災害の増加にあるが、実際、現地を訪れた私たちは目を疑うような光景に出くわしたことがある。そこは水田地帯であり稔りの収穫期のはずなのに、数日來つづけて降った雨のために、見渡す限り一面、洪水の海と化していた。その年に入ってすでに 4 度目の大洪水らしい。1 週間以上も水浸しが続けば、稲作は壊滅状態となり、農民や地域住民の暮らしは成り立たない。

近年、こうした洪水被害はアジア各国の河川や下流の都市部でも多発している。その主な要因は、地球温暖化という長期的な気候変動の影響に加えて、上流域での森林破壊と土地利用の改変にあることが指摘されている。そこで私たちは、スマトラ島南部のコーヒー・プランテーションを対象として、集水域の土地利用の変化と水循環への影響について共同研究を行ってきた。その目的は、上流域の土地利用のあり方が下流域にどんな影響を及ぼし、また、環境保全型のアグロフォレストリー（混農林業）の導入によって水循環がいかに改善されるのか、それを生態的および経済的側面から解明することであった。

ボルネオ島と並んで、スマトラ島の森林破壊はすさまじく、生態系破壊の影響や二酸化炭素の排出増加が危惧されている。すなわち、過剰な森林伐採とプランテーションの拡大によって大量の土砂流出が発生するとともに、下流域での水質汚染がひきおこされている。どうすればこの悪循環を食い止め、環境問題を解決できるのか、まさに地球規模の課題となっている。

そこで私たちが挑戦したもう一つの方法は、PES（環境直接支払い）という経済的な手法の導入とその検証であった。この手法は国連開発計画（UNDP）などで近年採用されているが、生態系サービスの恩恵を受ける下流側（受益者）から、環境保全対応を行う上流域の農林業の従事者（供給者）に対して直接的あるいは間接的に経済的支払いを行う手法として注目されている。スマトラ島では、大学研究者の協力のもと、コーヒーの国際取引を行う多国籍企業その他の関係者が仲介役となって、このような仕組み作りが導入され、徐々に地域内で広がりを見せている。

周知のように、わが国では畠山重篤さん提唱による「森は海の恋人」という発想に基づいて、上流・下流間の連携によって植林その他の資源管理の対策が幅広く行われている。また、環境直接支払いについては、農林水産省によって「農地・水・環境保全向上対策」が約 10 年前から政策的に本格導入されてきた。今後、とくに発展途上国においてはこうした流域連携手法は貧しい農民たちにとって一つの経済問題の解決につながる道筋であると同時に、流域全体にとっての持続的な土地利用を可能にするという点でより効果的であり、環境面からも高く評価されるであろう。

近年の大水害、たとえば一昨年に起きた鬼怒川のケースに見られるように、ダムや堤防などのハード施設だけでは大洪水の被害は防ぎきれない。土地利用の状況と変化に応じて流域全体で事業の見直しを行う必要がある。一つの典型例として「滋賀県流域治水の推進に関する条例」に注目したい。そこでは地域住民との連携・協力のもと、流域全体で治水に取り組む新しい手法の導入とともに、「ながす」「ためる」「とどめる」「そなえる」という平易な言葉による発想の転換が示されている。

世界各地で洪水が多発し、水資源が危機に瀕する今こそ、流域連携による水管理システムに関する日本の経験と伝統的な知恵は計り知れない価値を有していると思われる。わが国のこのような貴重な経験を、ぜひとも途上国の持続的な発展に生かしたいものである。

【OM 便り】

三重の田舎にも「出会い」の場を —ゲストハウスイロンゴをオープン！—

倉田 麻里

(2007 年入寮)

大学院最後の年を「出会いの家」HdB で過ごしたことをきっかけに、「海外に住んで働きたい」という思いが強くなり、環境 NGO イカオ・アコに就職し、フィリピンのネグロス島に 9 年間駐在した。その間には、数人の HdB の仲間も、現地を訪ねてくれた。

異なる価値観や生活スタイルの中で、「自分を大切にする」文化に気づいた。今まで日本の社会の中で作り上げられてきた「自分」がどんどん洗われ、異なる価値観の人々と接する中で、自分が見えてきた。フィリピンの上流階級から貧困層まで、様々な人と接する中で、共通して感じたことは、「自分を大切にすることで、他人を大切にできる」ということだ。

2012 年、もっと多くの若者に、フィリピンに来て、自分が発見できたようなことを、感じてほしいという思いで、現地に国際協力研修センターをオープンした。これまでの 7 年間で 500 人以上の若者を受け入れ、沢山の「出会い」を提供してきた。

フィリピンに飛び込んだことは、私にとって「水を得た魚」のようなものであった。つまり、その環境のすべてが、私を活かしてくれていた。しかし、気がかりなことが一つあった。それは、愛すべき「故郷」である。

私は子供の頃、里の自然に遊ばされながら、「芯が強く、求めた方向へまっすぐ突き進む」祖父の背中を見て育った。その故郷が、今、音を立てずに消えていこうとしている。そろそろタイムリミットだ。そう感じた私は、帰国を決意した。悪い予感が的中したのか、帰国後半年足らずで尊敬する祖父が他界した。

私に与えられた使命は、祖父が残してくれた、築 130 年のおくどさんのある古民家と農地を活用すること。そして、私を育ててくれた故郷にまた、子供たちの声が響き渡るようにすること。そのためのキーワードは、やはり「出会い」になると思っている。

国籍、年齢、性別を問わず、「農」を通して、人々が出会える。HdB での共同生活やフィリピンでの生活の経験を活かし、三重県の田舎にゲストハウス・イロンゴをオープンさせます。 <https://www.guesthouseilonggo.com/>



The Legendary Ping-Pong Boy

I-Ting Huai-Ching Liu (Soraya)

(京都大学人間・環境学研究科)

I know that we're supposed to tell stories about our life in HdB, but this story isn't about me (or maybe it is, sort of). This story is about a boy who once lived in HdB. Let's call him the Ping-Pong Boy. There are two reasons for that. First, as you may have guessed, is because he is very good at playing ping-pong (table tennis). And by that I mean, Very. Good. Whoever has had the chance to play or train with him could not disagree with me. The second reason is because, strange as it may seem, one can never guess his age without some info digging and an unbelievable look of surprise on their face. He is tall and skinny, with long arms and long legs. His semi-long hair covers his forehead, and behind the rectangular glasses are features of a young boy. If it weren't for the fact that he was doing his PhD, people could have easily assumed that he was 18. Actually if it weren't for the fact that you have to be 18 to live in HdB, my guess would have been 15.

The Ping-Pong Boy moved into HdB 2 years before I did, first as a scholar then became a resident the second semester. My first encounter with him was at a common meal, when I was invited as a guest. He cooked Gapao rice, a typical Thai dish which, as I learned later, was also his typical dish for common meal and International Food Festival. When I moved in a semester later he was the advisor, and we happened to be in the same team for Sports Day, which involved some chasing and problem-solving games in Kyoto Imperial Palace. But apart from that, nothing brought us to talk to each other.

This changed once we started playing ping-pong after the first or second house meeting. I used to play ping-pong in high school in Taiwan, but have stopped for a long time since it wasn't popular in Canada. I was very happy that there was a ping-pong table in HdB so I could start practicing again. People saw how I played, and told me that I should play with him. We played, and he totally impressed me. Not only how fast he moved and how well he returned the balls, making me run around the table, but also the fact that he only started playing since he entered HdB 2 years ago. Because there were many people playing that night, we had to wait until late night to monopolize the table. As many of the old residents who were good at ping-pong moved out the semester I moved in, he was equally happy to find a partner whom he could practice with. He would train me to spin the balls, and my smashes would train his return with cutting. It was a perfect match, and since then we would meet up regularly to practice, sometimes continuing until 3 am in the morning. At the beginning, we didn't talk about anything other than ping-pong

techniques, and after each practice we would just say “Goodnight!” to each other and return to our respective rooms. Little by little, we started conversing over the bar during water breaks. He was a civil engineer doing a PhD in Kyoto University. His lab was at Katsura campus, which means he needed to take the shuttle bus every morning. He was good at sports and went running regularly, listened to music and even played the ukulele, but was not a big fan of classical music nor karaoke.

The first sign occurred to me the day we first went to Yodobashi together. I needed to fix my computer, and he needed to buy something too. I didn’t think we would be going together, for he wasn’t available that day and I couldn’t wait until the weekend, but on that day he suddenly said that he could go with me. We cycled all the way to Yodobashi, and he was impressed that I managed to follow. After we had dinner and returned to HdB, I sat playing the piano as usual. A girl friend came to talk to me, and all of a sudden she stopped. She said Hi to him, for he had been standing behind listening, without me noticing. My heart skipped a beat, for I knew he wasn’t interested in classical music. Another time I was ill and couldn’t play ping-pong, he brewed some ginger tea from Thailand and left the teapot at my door, leaving me a warm and pleasant surprise. More and more often we would hang out in the lobby or practice together. Once when we were at the ping-pong table again, a girl friend heard us from the lobby, opened the sliding doors, and asked me directly in Mandarin: “Are you guys in love?” I just laughed but didn’t answer. “What did she say?” he asked. “Nothing,” I returned the ball. But as things always go in HdB, nothing eventually turned into something.

We started dating the second semester after I moved in, and for a year we lived together in HdB, him on the fourth floor and me on the second. We were both Sagittarius, thus equally self-focused. We would watch movies and TV series together, usually in Mandarin with Thai subtitles. As long as I wasn’t clumsy enough to break or spill things in his room, making him angry (as shown in the picture he drew lol), we lived in peace and enjoyed each other’s company. He supported me through the difficult times of transition, the problems I faced while trying to build a community in HdB. He was a good consultant and companion, knowing how to calm things and people down. My favorite phrase of his was: “Trust me, I’m an engineer”. Sounds very cool (kakkoi) and reliable, eh? Then the engineer moved out while finishing his Doctoral thesis, but remained a frequent visitor and ping-pong player in HdB, joining almost every common meal. Because of his presence, patience and passion, more and more people started playing ping-pong, and many saw significant improvement under his training. The girls he trained called him “Shisho”, although he insisted that he could not be a teacher for them. He had many friends inside and outside the dorm, and was adored by many more. Besides playing ping-pong and writing thesis, we travelled together to all prefectures of the Chugoku Area, visiting the Atomic Bomb Dome and the Miyashima Shrine in Hiroshima, riding camels and exploring Detective Conan’s town in Tottori. We even went all the way to Izumo Taisha Shrine in Shimane, which he did for me, for he wasn’t interested in Japanese mythology lol. Once he

saved my life by informing my friend that I wasn't answering the phone, and after finding out that I was unconscious, he came to HdB and together they called the ambulance. To thank me for my contribution to his Doctoral thesis, he bought me a soft cutie which I named "Xiao Teng Yi", meaning "little rice-ball" in Taiwanese.

Ping-Pong Boy obtained his PhD, and in June last year started a job at the Ministry of Finance in Bangkok. He left Kyoto and left a legend, while I stayed and became the longest-staying resident of HdB (scholar now). If you've been living here for long enough, I'm sure you know whom I'm talking about. If you're new you may never have met him, but might have heard bits and pieces about him. Whichever the case, I want to share this story with you so that he would be known and remembered by all future residents. Because for me, in the 4 years that I have been living in HdB, all my memories gather around him, the Legendary Ping-Pong Boy.

【レジデントより】

HdB がくれたもの

#202 赤尾 奏音（日本）

京都大学総合人間学部

HdB で暮らし始めて1年と2か月。HdB での生活は私に様々な気づきと変化をくれました。

1 つ目。自分は人と話し、心を通わせるのが好きだということ。HdB に来た頃は自分の英語力のなさ知らない人ばかりの環境に戸惑い、なかなかロビーに降りられず、ロビーから聞こえてくる楽しそうな笑い声に羨ましさを募らせる毎日でした。しかしキッチンや玄関、コモンミールやその他のイベントで会うたびに温かく話しかけてくれる、優しいレジデントのおかげで次第にロビーに行くことへの不安も消えました。今では外から帰ってきたらまずロビーに寄ってみんなとお喋りしてから部屋に帰るのが日課となりました。課題があったりして早く部屋に戻らないといけない時でも、楽しくてついつい長居してしまう時がよくあります。(笑) そんな毎日の中で、自分は一人の時間が好きだと思っていましたが、人と一緒にいる時間が同じくらい、いやそれ以上に好きなことに次第に気づきました。コモンミールやパーティーなどのイベント以外の時でも、よく一緒に料理をしたり、勉強したり、余ったご飯をおすそ分けしたり、してもらったり、こたつに入って喋ったり、ロビーで TV を見たりするようになりました。そんな日常生活はとても楽しく心地いいです。こんなにも気軽に誰かと一緒に時間を過ごせるのは HdB のいいところの 1 つだと思います。

2 つ目。自分は人と協力して何かを達成するのが好きだということ。もともと、自分は個人作業が好きなほうだと思っていました。そのため、最初のセメスターでは一人でやる作業がメインのイヤーブック当番をしていました。しかし今年の前期になって IFF 当番をしたことで考え方が変わりました。IFF を運営するためには料理の決定やアレルギーの確認、調理器具の配置、食材の調達、レシピの表示、飾りつけなどたくさんの仕事を当番で協力してこなさなければいけません。サークルやバイトが忙しくてなかなか当番としての仕事が出来なかったり、夜中の 3 時まで飾りつけを作って睡眠不足になったりもしましたが、当日はとても楽しく、やりきったという達成感がありました。大学に入ってから、なにか一つの目標に向かってみんなで努力するこ

とがなかったため、この経験は新鮮でした。この時に感じた楽しさがもとになって後期は X' mas Party 当番をすることにしました。X' mas Party 当番をする中でも、英語のミーティングがなかなか理解できなかったり、プレゼント作りが終わらなかったり、始まる直前に買い忘れに気づいたり大変なこともありましたが、当番以外の人もたくさん協力してくれて乗り越えることが出来ました。終わった後に「パーティー楽しかったよ」とか「当番ありがとう、お疲れ様」と言ってもらえた時は当番をやっている良かった、と思うことができました。

このように、HdB で暮らすうちに自分でも知らなかった一面に気づいたり今までの考え方が変わったりすることが増えました。それに伴って自分のものの見方が偏っていたことや価値観が固定化していたことにも気づきました。自分に様々な変化を与えてくれた HdB という場所が、そして何より、日々一緒に暮らしているみんなが大好きです。今では HdB 抜きでの大学生活が考えられないくらい、ここは私にとって大切な場所です。みんないつも本当にありがとう！！



Nice meet and big growth in HdB

#204 韓 思平 (中国)

京都大学

私は HdB で半年間住みました。HdB にはたくさんの国籍を持つてる人が住んでいます。HdB では二週間一回ぐらいで様々なイベントを行っています。私はこの前日本語や英語を練習するために、HdB に引っ越ししました。もちろん住んでる間に日本語や英語を伸ばしたけど、HdB が私に教えるもっと重要なことは意識の変化です。一つの変化が外国語をしゃべるのは目的ではなくてツールです。外国語をペラペラしゃべることではなくて世界の多様性を受け入れ、異なる見方で世界を理解していくのは私たち外国語を勉強するもともとの原因です。一緒に活動を行うとき、異なる文化を持っている人々と交流することを通じて新しいアイデアを思い出すことができます。HdB には異なる意見を受け入れ、自由に発言できる雰囲気がある。

もう一つの変化が社会への貢献です。私たちが今住んでる寮の家賃が安いし、活動の予算をもらえるのは財団の支えがあるからです。この寮は今まで存続するには異文化交流に関心を持つたたくさんの人の支持が不可欠です。私たちも自分の喜びを考えだけでなく、地域への貢献を心掛けています。私達はフランスやアフリカの文化や料理を日本人家庭に紹介して日本人家庭と一緒に料理を作るクッキングイベントを行いました。私たちも京都市での異文化交流に少々力を入れました。これから私も受け側として社会からの世話をもらうだけでなくてあげる側として社会への貢献に取り込んで行きたいと思っています。

HdB に住んでるのは私の人生での貴重な経験です。HdB が私に教えることを将来の人生に活かしていこうと思っています。

HdB—place for more experiences and better self-exploration

#208 Hai Trinh (Vietnam)

Graduate School of Medicine, Kyoto University

This time last year, I was in the middle of nothing, indecisive about what I should do after my Bachelor course. Staying in Japan-my second home country, going back to Vietnam-my home country, or going to France- a country of my dream for quite a long time or? Studying master course in the same field or finding a job in a totally unrelated field? All I felt at that time was that I was not really ready to leave my true love city Kyoto. I was not ready to leave Japan with my Japanese still in the middle of nowhere. I was not ready to leave Kyoto University without experiencing life in dormitory, which I had longed for quite a long time. I wrote the application for HdB on the day of deadline and submitted it ten minutes before the deadline. I came to the interview unprepared. Passing or failing to get accepted to HdB were both good to me then. I somehow got accepted. Perhaps because there was no Vietnamese at the dorm then.

In my first semester, I learned how to overcome "anti-social" aspect of myself. I was always uncomfortable with parties, not knowing how to start a conversation and what to talk with unfamiliar people. Thanks to Stef and Judy, who always start conversations and get many people involved into, I started to talk with more residents. Thanks to the IFF event, of which I was one of the Toubans, I knew more about my teammates, went to the lobby more often and gradually enjoyed more group talks. I also learned how to see people off without feeling goodbye. I used to feel very sad at any farewell, thinking that things would never be as good as it once be. However here in HdB, connections and relationships last very long, very strong even after that member leaves dorm for very far place, either in Japan or somewhere in the world.

Second semester brings me many chances to experience and enjoy many new things for the first time (I missed quite a lot of activities during the first semester). The Sport Day event reminded me the fresh feeling of being a novice, the feeling of being nervous, uncertain but

excited when one first learns something. It was the first time in my life I played basketball and I have not learned any new sport for quite a long time. The Trip to Amanohashidate brought me chances to explore new aspects of many people. I got to know how interesting Jason can be when he is drunken, how excellent Serena is at sports, how easily Hiro can get offended and how strict Chris can be in terms of food. Cooking events gave me opportunities to learn how to organize an event, from advertising the events, meeting in group to facilitating on the day of the events. Not only official events but also spontaneous events in HdB bring me valuable experiences. Karaoke after Thanksgiving event made me realized that karaoke is really amusing and relaxing to me. I also got to know music tastes of many residents. By the way, I do like Serena's deep warm "manly" voice when she raps. Going to bar after Christmas event was quite an eye-opener to me. I learned how easily people can talk to strangers at bar. I learned from Souma why people love smoking while drinking. I also learned how long and strong the smell of smoke can last on your clothes. Anyway, it was really worth experience once.

In HdB, through many interactions in daily life as well as in official and unofficial events, I could explore many different "conflicting" aspects in the same person of many residents including myself, regardless of nationalities. In other words, HdB is like a small living "library" about human being to me. I enjoy knowing new side-either good or bad- of anyone whom I think I know well, accepting it naturally without judging. What I enjoy more in HdB is breaking many of prejudices I have had, knowing new aspect of myself through interactions with many people of different backgrounds and living fruitfully day by day. I have had so many unforgettable memories with many people in HdB, which may take me weeks to write down. I do appreciate many "Encounters" HdB brings to me, with many different people from different backgrounds and with the same people in many different situations, through which I learn not only about different cultures but also about many people as individuals.

Farewell to HdB

405 Alexander Van-Brunt (New Zealand)
Graduate School of Science, Kyoto University

This was my final semester at HdB. A place that, in no uncertain terms, was my home. My departure from it marks a distinct full stop of a passage in my Life.

Having resided at HdB for two full years, and been president for one of them, this dormitory has definitely left traces on me. These are mostly in subtle ways, relating to my familiarity with other cultural ideals - a sort of implicit education that one gets upon living in HdB. This exposure has served me well so far in my time at Oxford, which further makes me savour the HdB experience.

In some sense I feel disconnected as ever from any culture - what is familiar and strange to me is now a blur. However I would like to believe that this has led me to become a more global citizen, rather than a nationalist. Perhaps this is exactly the sort of thing the founders of HdB had in mind.

At time of writing I am at Merton College in Oxford. Often I reflect on the contrasts between HdB and Merton. Like HdB the college had its own revolutionary vision of establishing a community of independent academics, and like HdB it was from modest beginnings. Merton was founded 800 years ago and has made a striking impact on the world. It gives me hope that there will be a HdB many years from now - having made history. Thus it is with enthusiasm that I welcome the new residents and the new renovations.

さよなら HdB

#407 Van Der Struijk Stef (The Netherlands)
Department of Intelligence Science and Technology, Kyoto University



Time flies so fast, I'm not even living in HdB anymore. Wondering how you'll look after your amazing time at HdB is at an end? Just look to the left. 2 years in HdB has given me many precious experiences. The people living here, and the dorm in its whole, create an amazing environment that is hard to find in other places in the world. We surely have found a treasure here. I tried living in a share-house in Tokyo, but nope, the atmosphere there is not even close to the connections people share in HdB.

But let's not go all sad, because HdB has mostly been a fun time! Both the events we've organized and just the simple days where we spend our time in the lobby until late in the night, they have created unforgettable memories.

Thank you for the food we shared during the common meals. Thank you for making the trips to Kobe, Korea and others awesome. Thank you for having the friendly competitions, whether it was with ping pong, PlayStation games or board games. Thank you for applauding our Christmas dance performance with weird outfits. Thank you for the insights you've given me in your cultural background and thank you for much more! I'll treasure these memories.

Tokyo is not very far, so please come visit me (or wherever I'll be) when you'!
I'm always looking forward to hear from you again, whether in person or with a message!

Be the architect of your experiences.

- Lisa Feldman Barrett

So... What do you actually believe

#418 Sandra Marie Beverungen (German)

ISJP, NCC Center

I arrived in HdB in September 2018 and sadly need to leave again in February to return to my theology studies in Göttingen, Germany, so I have only been living in HdB around three months but coming back after classes feels like coming home anyway. Common Meals, playing billiard, singing for Thanksgiving or just sitting in the Lobby until late at night talking about God knows what.

I came to Japan because I wanted to learn more about Eastern religions but instead I learned about what it means to find friends that were raised thousands of kilometres away from Germany and still share a lot of what I might call “Christian values” which don’t seem to be that Christian at all in the end.

The HdB tries to forge peace by letting people meet in a setting that couldn’t be any closer than living together in one house and sharing time and stories and experiences. And I think this is exactly what we need in a time of nationalistic conflicts all over the world: We need to reduce our prejudices and get together to see that in the end all of us are human beings that live on this one and only world together.

A lot of you asked me about my wish to become a pastor and even more approached me with your questions about Christianity, a religion I was raised into from the beginning and never questioned as much as I did in my time here. And I tried to find an answer for every question, without forcing you to become Christian yourself. And you answered my questions about your beliefs and cultures when I asked about that in return.

So... what do I believe in? I believe in love and compassion, in peace and harmony and before all of this I believe in friendship and mutual understanding!

When I go home, I will miss all of it by the bottom of my heart and I hope to stay in contact with all of you! And maybe someday I can welcome you in Germany to show you that our trains really are always late and that we really have the best bread and do not all wear Lederhosen and drink beer but first of all I would want to show you the same warmth you showed me in every week, on every day and in every minute of my stay in Japan.

どうもありがとうございました！

やって みなきゃ 変わらない 苦手克服できたんちゃう！？

#419 大川 夏海（日本）

立命館大学国際関係学部

HdB に入って 1 年と 9 か月。

ここでの時間は驚くほど早く感じ、その反面、充実感と共に濃厚な思い出として刻まれていく…

2018 年、私にとっての HdB 生活は「挑戦」の連続でした。

最も印象的なのは今年 1 年間を通して務めた PR 当番での経験です。

私は、1 年ほど前に建て替え工事が実現しない限り、52 年の歴史を誇るここ HdB の閉鎖が危ぶまれているということを知りました。留学生にとっての日本の故郷であり、異文化共生の体現する貴重な場所を何としても閉ざしたくない一心で、私は PR 当番に立候補し、寄付金を集めるための活動に踏み切りました。

春セメスターが始まる頃、寮の耐震工事のための募金活動が本格始動し、観光名所での募金箱設置やクラウドファンディングが新たに設けられ、各新聞社や NHK から特集取材をして頂く機会がありました。取材を通して HdB の存在とその魅力を知ってもらい、レジデントの想いをより多くの人に伝えて、ここ京都からグローバルな交流への理解を促進していく非常に貴重な機会を持つことができました。

後期セメスターでは、PR の役割と同時にチームメンバーとしても活動する機会を頂きました。新しいレジデントを迎えるにあたり、寮の雰囲気づくりや週末を利用した親睦を深めるためのイベントを企画するなど居心地の良い環境づくりをサポートすることを念頭にアイデアを出し合いながら取り組みました。

私は HdB に来て、今年で全ての行事を 2 度ずつ経験してきました。その時々で役割は異なりますが、合計すると少なくとも 30 回以上イベントの開催側という立場を経験してきました。言語、国籍、宗教、価値観の異なる集団の中で協力して適切な形でイベントの成功を目指す上で、私は時に挫折し、壁を感じて、そのたびに自信がなくなり、力不足を痛感させられる場面が幾度もありました。その一つの例として、今年の秋セメスターより PR 活動の一環として新規立案し始動した「親子の国際クッキングイベント」でのことです、運営に至るまでの道のりは振り返ると学びの多い経験となりました。京都市より後援を頂き、京都市内の近隣の方々をゲストに招いて、実践的

に国際交流（多国籍料理・英語・異文化体験）を行うことでグローバル都市京都の活性化を図ることを目的にした2本立てのイベントで、実施の9か月ほど前からレジデントのアイデアや既存のイベントを参考に企画書作成に取り掛かりました。途中、区役所に活動援助の申請を受けるためプレゼンに行ったり、京都市民に対する公益性や私たちが提供できる価値って何だろうと試行錯誤し、主に委員会の方々、ハウスペアレント、オフィスの樋口さんにサポート頂き、6月ごろ実施の目途が立ちました。レジデントは新たにイベントが増えることに伴って、普段の学校生活に加え、準備などで負担が大きくなることを懸念し、反対意見が出たり積極的なPR活動に賛同してもらうことが難しい時期がありました。いざ、実施日が近づいた頃イベントの運営スタッフとして数名手を挙げてくれました。準備過程では、皆をリードしてタスクの指示を出したり、先を見据えた計画を伝えなくてはならなかったりと企画者としてリーダーシップを発揮しなければならない場面が多々ありました。

私の一番苦手なこと…それは“人に仕事を振ること”そして時々必要な“断ること”です。

例え自分が長い時間多くのタスクをこなす状況は苦に思わなくても、誰かに対して「これやってもらえる？お願いします」の一言を言うことは、わたし自身実にとって苦手なのです。忙しいんじゃないかな？面倒かな？もし怪訝な表情を浮かべたらどうしよう…と相手の機嫌を損ねてしまうことを恐れて言い出せないことがよくあります。新たな取り組みであり、援助のもと行う対外的なイベントということから、少しのプレッシャーのもと私はイベントの成功と着実な手段・クオリティーにどこか着目しすぎていたのかもしれません。

相談すると何人かのレジデントは、そんな時アドバイスをくれました。その言葉一つひとつを受けて改めて自分のクセや特徴を客観視でき、自分の考えているビジョンを言いにくくても言葉でしっかりと共有して、時には立場上“指示をする嫌われ役”を買うこともリーダーの一つの責任なのだという事に気付かされました。

それ以降、躊躇いがありましたが「やってみなきゃ変わらない！」の精神で言いにくいことであっても言葉できちんと伝え、自分のできることできないことを判断して集団全体として上手く機能する環境づくりに努力しました。

この経験から、人と協力して何かを成し遂げる上で日本語でも英語でも言語を問わずきちんと自分の意志を伝え協力してもらえるように働きかけるリーダーの役割の大切さと難しさを実践から改めて学ぶことができました。

私はここ HdB に来て、人の姿を見て自分の状態を改めて見直し、その人の在り方から学ぼうとする姿勢が自然と身についたように感じます。国籍が違って結局は人と

人です。日本人だから〇〇というパターンの発想しがちですが、実際は歳が変わらない留学生の誰かは自分よりももっと礼儀正しかったり、もっと人の気持ちを汲んでいたりと、ここでは何気ない日常の中で見習うべきことがたくさん見つかります。

こんな風にお互いを高め合い、力を合わせて何事にも一生懸命になれる HdB の文化を私は誇らしく思います。

☆私の HdB の好きなところ☆

- ① 自分だけの「当たり前」じゃ通用しない空間
- ② 私を叱ってくれる人がいる
- ③ 家に帰るのが待ち遠しいと思わせてくれるくらい魅力的で楽しい“我が家”
- ④ イベントにみんなで一丸となって一生懸命に打ち込むことのできる環境
- ⑤ 気持ちと考えをきちんと言葉で相手に伝えなくちゃ始まらないところ
- ⑥ 切磋琢磨し合える友の存在
- ⑦ 自分の力を思いっきり試せる場所
- ⑧ 困ったときには助け合える仲間の存在
- ⑨ 新しいチャレンジにあふれている
- ⑩ 人のため、みんなのために頑張りたいと思える環境



【活動報告】

A Strong Reminder -Message from the House Family

Adriana Hidding (HM), Yuya Iida (HF), Yoji (HC), Hajime(HC)

The difficulties surrounding reconstruction work cause uncertainty, but at the same time they have been a trigger to think more about our reason of being. What role does our dormitory have, besides a place to live and enjoy life.

While we stick to our core message of life together, at the same time we adjust to our time and try to improve ourselves. We try to be not just visitors but part of our neighborhood. By inviting our neighbors over for food at the international foods festival, joining the Shogoin sports day, and now by introducing countries by cooking workshops to children. We furthermore give space and opportunities for cultural activities such as Brazilian Christmas, and the Islamic Eid al-Fitr. The house is thus both a gateway to Japan and the world.

By being this gateway the house proves its value, as international exchange can only be meaningful if we meet. Facilitating encounters and cultural activities is thus invaluable both to our local and international community.

As house parents we have for three years had the honor to be part of this project. As "live in advisors" we had to help our students on their journey. But often it has been the other way around. And as a big bonus we have gotten the chance to enjoy a world of cooking, from Vietnam and Brazil, to Zimbabwe, Madagascar and surprisingly tasty British dishes. I furthermore got opportunities to pretend I speak a bit of French and German, and try and pronounce Chinese words. These small encounters make me grateful for haven gotten the opportunity to be houseparent. I hope our children will have fond memories of the house, and keep on enjoying diversity.

The uncertainties about the future of the house are a strong reminder to us about what we have, what we want to protect, and what we want to give to future generations of students in Kyoto. It is the opportunity to live together, and learn how to respect differences. To appreciate diversity and to better get to know who we are to begin with. It gives us unique lessons in intercultural communication, organizing skills, and perhaps most importantly teaches us to no longer see people from a different culture as "the other".



2018年度 寮生活動行事

4月 7日(土)	歓迎会	Welcome Party
4月 14日(土)	スポーツデー	Sports Day
4月 20日(金)	コモンミール	Common Meal
5月 11日(金)	コモンミール	Common Meal
5月 12日(土)	セミナー	Seminar
5月 25日(金)	コモンミール	Common Meal
6月 8日(金)	コモンミール	Common Meal
6月 9~10日	旅行	Trip
6月 22日(金)	コモンミール	Common Meal
7月 7日(土)	国際食べ物祭り	International Food Festival
7月 8日(日)	大掃除	Cleaning Day
7月 13日(金)	コモンミールと選挙	Common Meal & Election
10月 6日(土)	歓迎会	Welcome Party
10月 13日(土)	スポーツデー	Sports Day
10月 19日(金)	コモンミール	Common Meal
10月 26日(金)	コモンミール	Common Meal
11月 4日(土)	地域交流 (親子の国際クッキング)	Public Relation
11月 10~11日	セミナー旅行	Seminar Trip
11月 16日(金)	コモンミール	Common Meal
11月 22日(木)	感謝祭	Thanks Giving Day
11月 30日(金)	コモンミール	Common Meal
12月 9日(日)	地域交流 (親子の国際クッキング)	Public Relation
12月 15日(土)	クリスマスパーティ	Christmas Party
12月 16日(日)	大掃除	Cleaning Day
1月 11日(金)	コモンミール	Common Meal
2月 1日(金)	コモンミールと選挙	Common Meal & Election

2018 年度 Welcome Party Speech

April 2018: Christopher West (Chairperson)

Good evening everyone and thank you for coming here tonight to welcome a new generation of students into HdB. It's lovely to see so many of you here, and I would just like to take a moment to appreciate the sheer variety of people here: we have students about to embark on their academic careers and esteemed professors; we have people who have crossed continents to come here and people from the other side of the Kamogawa; people who can speak one language and people who I am going to ask to translate this speech in a moment; old residents, new residents, new scholars, old residents who are becoming new scholars and extremely new residents! (Indicate 3 week old Hajime). This is probably to be expected from a house for international students, but when I talk to you all, I hear two common phrases again and again, two ideas that unite all of these people from wildly different backgrounds. The first is that they want to knock the house down. (It's more positive than it sounds!) The second is that this house changes people for the better. This idea keeps resurfacing from many different people, and I agree! In my time here, I have seen the experiences, the opportunities and the friendships that life in this house provides shape us and allow us to grow for the better. So, to our new residents and scholars; I hope that you enjoy your time here, I hope that you will find your home here, and I hope that this place changes you. Welcome to HdB.

October 2018: Hiroaki Inoue (Chairperson)

Welcome to HdB. I'm happy to see you. HdB is not just the place we sleep and wake up, here is more like home. We talk at lobby almost every night, and we have many events to know each other and have fun. When you back to HdB, people in lobby will welcome to you. You will know how great this is. This helps you to do your daily life. Residents are from all over the world, and they study different field. And every semester many people leave here and many people come here. So you can see many different people. Many hello and good bye. When I came to here, I was worried about many things. But I spend just one week, I surprised how great place here is. People are really kind, smart. Every resident helped me to used to be here. I think You will also experience this. I think every people come to better, spending time at here. , Especially in the way to communicate with others. So please don't afraid to anything. Please come to lobby! Please join many event! Let's spend comfortable and fun time!

2018 年度 寮生活動報告

チーム Team

担 当：(前期) Christopher West (Chairperson)、Hiroaki Inoue (Vice-Chairperson)、
Chen Yijun (Accountant)、Manohar Rutvika Nandan (Secretary)、
SohmaHirai (Advisor)
(後期) Hiro akiInoue (Chairperson)、Momoko Takeda (Vice-Chairperson)、
Richard Welsh (Accountant)、Serena Okada (Secretary)、
Natsumi Ohkawa (Advisor)

内 容：Chairperson、Vice-Chairperson の司会で歓迎会、コモンミール後のハウス
ミーティングを運営した。必要に応じて Advisor が補助や当番間の連絡・
引継ぎ等を行ない、Accountant はチーム費の予算管理、Secretary はミー
ティングの記録等を行なった。また、チームはハウスペアレンツととも
に年間行事を計画し、学期末に選挙を行ない、次期チームのメンバーを
決定した。

実 施 日： 4 月 7 日 歓 迎 会 (49 人)
7 月 13 日 チーム選挙 (28 人)
10 月 6 日 歓 迎 会 (46 人)
2 月 1 日 チーム選挙 (28 人)

実 施 場 所：京都国際学生の家 HdB

コモンミール Common Meal

当番担当者：(前期) Judy、Tosan、Vanny (後期) Sohma、Yui、Vanny

実施日&参加者：4月20日 (39人)、5月11日 (42人)、5月25日 (45人)、
6月8日 (40人)、6月22日 (38人)、7月13日 (48人)、
10月19日 (40人)、10月26日 (44人)、11月16日 (38人)、
11月30日 (41人)、1月11日 (35人)、2月1日 (52人)

実 施 場 所：京都国際学生の家 HdB ホール

内 容：週末の食事を在寮生がハウスファミリー、
スタッフとともに調理提供して同じ場
所で同じ時間を過ごした。
食を通した寮生とハウスファミリーと
の対話は創設当初よりもっとも大切に
されてきた。



スポーツデイ Sports Day

当番担当者：(前期) クラリス、ハスナイン (後期) 陳、湯

実 施 日：4月14日(24人)、10月13日(31人)

実 施 場 所：京都国際学生の家 HdB 運動場ほか

内 容：新寮生を迎えて日が浅い時期に、身体を動かしながら交流を図ることを目的にスポーツデイをハウス運動場および卓球場で実施した。種目は6人7脚リレー、バスケットボール、フットサル、卓球など。前期、後期ともに天候に恵まれ、清々しい一日となった。

旅行Trip

当番担当者：韓思平、武田桃子、Yui、Stef

実 施 日：6月9～10日(一泊二日)

参 加 者：23人

実 施 場 所：神戸

内 容：Kobe trip! : A multi-cultural tour

一日目…北野工房のまち、モスク、中華街、トリックアート・不思議な領事館見学

二日目…ビーチ、五色塚古墳、地震博物館見学

体験型観光スポット「北野工房のまち」では、豚まん作り、アップルカービングの体験実習で食べる楽しみと見る楽しみを味わうことができた。イスラム教会のモスク訪問では祈祷を見学し、信仰や習慣やなどイスラム教文化について学習した。昼食は中華街で中国人留学生から中国の食文化についての話をききながら。



五色塚古墳は兵庫県内最大規模、国の重要文化財にも指定されている。現地解散の後、希望者だけで神戸地震博物館を見学した。地震の無い国から来た参加者も日本の地震や防災知識を学習したが、図らずもこの見学の9日後6月18日に大阪府北部地震が発生し、学んだ知識を生かす機会がおとずれてしまった。



セミナーSeminar（前期）

当番担当者：久能賢蔵、リー・ヒョリム

実 施 日：5月12日

参 加 者：21人

実 施 場 所：京都国際学生の家 HdB ホール

内 容：Kpop ダンス

Puspa 華さん指導のもといつもとは雰囲気異なるセミナーで、参加者が実際に体を動かす企画を試みた。

セミナー旅行 Seminar trip（後期）

当番担当者：Jason、Kimiko、Wu

実 施 日：11月10～11日

参 加 者：14人

実 施 場 所：天橋立 舞鶴

内 容：多くの留学生が日本海側の京都を訪れたことがなかったため、海の京都からみる歴史をテーマに天橋立および舞鶴を訪れた。舞鶴は一漁村が日本の近代化の過程で造船や海軍の港として拓かれてきた歴史をもち、現在も自衛隊基地が残る。同時に舞鶴港は戦前から大陸や半島との一般航路の発着の場でもあり、また戦後多くの人々が大陸から引き揚げてきた港でもある。近年は引き揚げ記念館もオープンしており、人々の移動・交流と平和を考えるのに多くの事例を提供してくれる。当番はセミナー課題として「海の京都の歴史から考える平和」についてレポートを参加者にかすとともに、先々でディスカッションを実施していた。とくにドイツからの参加者が「軍」と専守防衛とについて自国との比較の中で議論を展開しており、参加者一同の関心を集めていた。



The group picture standing in front of the sign of “Amanohashidate”

国際食べ物まつり International Food Festival

当番担当者：Hai、Nayoung、Kimiko、Kanane、Chiho、Yamahira

実 施 日：7月7日

参 加 者：74人

実 施 場 所：京都国際学生の家

内 容：在寮生の母国料理等の紹介および提供

Preparing and cooking food together, trying many dishes from different cultures, enjoying the event with partners or friends introducing international cultures to Japanese people...all those things made the event memorable to many people. It can be said that the event helped bring people and cultures close together.



感謝祭 Thanksgiving Party

当番担当者：Tomo、Sandra、Marie、Satoshi、Rutvika

実 施 日：11月22日

参 加 者：75人

実 施 場 所：京都国際学生の家

内 容：京都国際学生の家を支援・支持してくださる個人や団体をお招きして在寮生の母国料理等でおもてなし。
在寮生、ハウスファミリー、スタッフ等総出の準備でおもてなし、喜んでいただけたでしょうか。

クリスマスパーティ Christmas Party

当番担当者：Chris、Kanane、Ashif、Babu、Wu

実 施 日：12月14日

参 加 者：73人

実 施 場 所：京都国際学生の家 HdB

内 容：HdB 創設時からの最大の協力者スイススイストアジアミッションの宗教理念にもとづく年末の行事
冬休みを前に料理、ゲーム、プレゼント交換などを行なう行事は学生達の楽しみとなっている。

地域交流 Public Relation

当番担当者：大川、Hai、韓

対外募金活動

募金委員会と一緒に、企業訪問をしたり、「留学生スタディ京都ネットワーク」に参加して、HdB の PR 活動などを行った。仏教会に募金委員会がお願いして設置された清水寺、銀閣寺、金閣寺の募金箱前で観光客に HdB の窮状を訴えた。



広報活動

異文化交流の促進をキーワードにホームページ、ブログと SNS（Facebook、Twitter、Instagram）を活用して寮生の日常の様子を定期的に発信し、留学生をはじめ京都内外で国際交流に関心を寄せる人たちに対して、グローバルな交流を始めるきっかけづくりを提供することを念頭に活動を行ってきた。

報道各社からの取材に対して国際寮としての取り組みを紹介し、HdB に対する在寮者の想いを多くの人に伝えてきた。

- 8月27日 クラウドファンディング活動を開始。
- HdB ホームページのリニューアルを行ない、公式プロモーションビデオを制作した。
- NHK TV 取材対応 (2018. 5.15放映)
- 京都新聞社取材対応 (2018. 6. 2掲載)
- 毎日新聞社取材対応 (2018. 7.4掲載)
- 朝日新聞社取材対応 (2018.12.18掲載)

親子の国際クッキング

地域交流の一環として京都市内の親子と寮生が一緒に異なる文化の学習や外国料理を作るクッキングイベント。料理とともにその国の伝統的な歌、外国語や他国の文化に興味を持ってもらうことが出来た。

11月4日：フランス料理（参加者 30 人）

12月9日：アフリカ料理（参加者 30 人）



館内衛生管理 Housekeeping

当番担当者：（前期）Tomo、Jason（後期）Nehal、Chiho

実施日：after each common meal day：1F bar&kitchen cleanup

monthly：2F&4F kitchen cleanup

7月 8日：館内大掃除

12月 16日：館内大掃除

参加者：29人

実施場所：京都国際学生の家

内容：日常的な共有スペースの整理整頓

コモンミール後の片付けおよび前後期ごとの館内大掃除における居住者ボランティア作業計画および指揮

【資料】

公益財団法人 京都国際学生の家 役員等

監 事 (2018 年度)

浅 田 拓 史	(大阪経済大学准教授、公認会計士)
折 田 泰 宏	(弁護士)
秋 津 元 輝	(京都大学教授、OM 会員)

評議員会 (2018 年度)

岩 崎 隆 二	(和晃技研㈱代表取締役社長、OM 会員)
中 島 理一郎	(元同志社大学教授、OM 会員)
吉 田 和 男	(京都大学名誉教授、京都産業大学教授)
西 尾 英之助	(京都日独協会会長)
平 野 克 己	(日本塗装機械工業会専務理事)
蔦 田 正 人	(蔦田内外国特許事務所代表、弁理士、OM 会員)
諏 訪 共 香	(元大学講師)
山 田 祐 仁	(辻調理師専門学校、学寮運営委員長、OM 会員)

理事会 (2018 年度)

理事長

内 海 博 司	(京都大学名誉教授、元 HF、OM 会員)
---------	-----------------------

常務理事

飯 田 悠 哉	(HF)
---------	------

理 事

上 村 多恵子	(京南倉庫㈱代表取締役社長)
村 田 翼 夫	(筑波大学名誉教授、OM 会員)
嘉 田 良 平	(四條畷学園大学教授、OM 会員)
吉 村 一 良	(京都大学教授、元 HF、OM 会員)

RUSTERHOLZ Andreas (関西学院大学文学部教授)

吉 川 晃 史	(熊本学園大学講師、公認会計士)
深 海 八 郎	(眺八海倶楽部総支配人)
永 井 千 秋	(元神戸大学医工連携コース客員教授)

HF	:House Father
HM	:House Mother
HC	:House Committee
OM	:Old Member

顧問（2018 年度）

所 久 雄	（社会福祉法人京都国際社会福祉協力会理事長）
神 田 啓 治	（京都大学名誉教授）
SPENNEMANN Klaus	（同志社大学名誉教授、 （公財）日本クリスチャンアカデミー理事長）
平 松 幸 三	（京都大学名誉教授、OM 会員）
森 棟 公 夫	（椋山学園理事長・学長、京都大学名誉教授）
柴 田 光 蔵	（京都大学名誉教授）

学寮運営委員会（HC）（2018 年度）

運営委員長

山 田 祐 仁	（辻調理師専門学校、OM 会員）
---------	------------------

運営委員

坂 口 貴 司	（三菱電機㈱、OM 会員）
鈴 木 あるの	（京都大学講師）
TANANGONAN Jean	（近畿大学講師、OM 会員）
DAVIS Peter	（Telecognix Corporation CEO）
戸口田 淳 也	（京都大学教授、元 HF 、OM 会員）
松 橋 眞 生	（元 HF、京都大学学際融合教育研究推進センター 健康長寿の総合医療開発ユニット）
長谷川 真 人	（京都大学教授）
北 島 薫	（京都大学教授、元 HM）
崔 英 樹	（京都市青少年科学センター職員、OM 会員）
飯 田 悠 哉	（HF）
HIDDING Adriana	（HM）
CHAIRPERSON of TEAM	
VICE CHAIRPERSON of TEAM	

職員（2018 年度）

樋 口 洋 子
清 水 良 子
吉 竹 慶 一

2018年度 補助金・寄付金・その他ご支援

2018年3月1日～2019年2月28日受領分

敬称略

補助金

平成30年度京都市外国人留学生交流等促進事業補助金 (ハウス行事に使わせていただいております。)	1,000,000円
---	------------

寄付金 (使途指定なし)

遺贈	村形 明子	10,000,000円
----	-------	-------------

寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者
京都桂川ロータリー (炉辺会合第1班)	ダニエリーとその仲間達	野村技工株式会社	有限会社ハイナン土屋俊宏

Shin Mingyeong	川 野 家 稔	杉 本 正 幸	深 海 八 郎
Ta-Yan Leong	河 南 晴 子	杉 山 喬 一	福 本 和 久
石 田 栄 子	カンタトーレ ドメニコ	鈴 木 武 夫	古 川 千 佳
泉 井 桂	菊 地 るみ子	鈴 木 松 郎	前 上 英 二
井 上 富 子	木 下 研 一	隅 田 芳 男	真 木 恵 子
井 上 雅 博	木 葉 丈 司	高 木 町	松 田 敬 一
岩 田 忠 久	クー テホン	高 木 泰 子	三 浦 一 郎
岩 沼 省 吾	楠 原 由 明	田 中 徳 壽	三 原 聖 則
上 田 学	國 津 信 一	田 端 喜八郎	村 崎 直 美
上 西 なつみ	窪 田 弘	辻 正 樹	村 松 拓
上 原 直三郎	小 熊 誠	土 居 英 樹	薮 田 定 男
宇 野 賀津子	小 暮 智 一	富 田 弘 子	山 口 忠 彦
大久保 嘉 高	小 西 淳 二	富 永 芳 徳	山 田 祐 仁
大 澤 美 佳	小 林 多美子	永 井 千 秋	山 本 慶 一
大 鹿 康 廣	歳 森 恵 美	中 島 理一郎	山 本 雅 英
岡 本 修 身	坂 口 貴 司	成 田 康 昭	吉 川 昭 一
岡 本 紀 男	佐 藤 義 彦	西 尾 英之助	吉 田 祐 子
置 田 和 永	澤 田 正 樹	西 本 太 観	吉 村 俊 之
加 藤 哲 雄	塩 田 浩 平	野 田 和 伸	匿 名 (一名)
鎌 野 幸 子	清 水 暁 子	平 田 康 夫	
河 瀬 光	清 水 勇	廣 啓司 (青隴)	

寄付金（研究者棟新築と本館耐震補強・改修工事費用に用途指定）

寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者
オムロン株式会社	京都洛中ロータリークラブ	京都ロータリークラブ	協和化学工業株式会社
讃志会有志	(社福)サン・アス会 吉川昭一	村田機械株式会社	

Chang Chew Chin	加 藤 哲 雄	土 谷 成 輝	古 作 ケイ子
fujii yugo	カンタトーレ ドメニコ	土 屋 寿美恵	古 田 和 子
Fukazawa Andres	木原 文太左右衛門	筒 井 紀 恵	ボウエン キンバリー
HEINRICH REINFRIED	窪 田 弘	寺 田 成 美	松 井 宏 友
hukami hachiro	小 島 和 典	戸 倉 三江子	松 浦 直 子
Koide Akiyoshi	小 島 富美子	所 幸 太	松 原 由紀子
Krisada Visavateeranon	近 藤 敬 司	所 久 雄	水 野 明 代
Lee Chin	斉 藤 郁 子	友 松 浩	村 田 翼 夫
Oshika Yasuhio	坂 本 幸 子	永 井 千 秋	森 公 子
T Aki	佐 藤 大 介	長 尾 真	文 字 健 二
Uno Tomoko	清 水 勇	新 居 哲	安 田 佳 子
稲 葉 カ ヨ	鈴 木 喜 六	西 井 正 弘	柳 田 由紀子
上 田 高 廣	鈴 木 松 郎	坂 野 泰 治	薮 下 義 文
うつみ ひとみ	全 泰 和	平 田 康 夫	山 岸 秀 夫
内 海 清 司	高 木 泰 子	ヒラノ カツミ	山 下 進 一
内 海 博 司	高 田 徳 子	平 見 松 夫	山 本 攻
内 海 匡 人	竹 田 洋 子	広 田 すみれ	吉 村 一 良
多 田 譲 治	谷 幸 治	福 田 勝 夫	吉 村 俊 之
岡 田 徳 子	田 野 かおり	福 山 浩 三	山 本 裕 貴
岡 本 徳 子	田 森 行 男	藤 平 三 穂	匿 名（1名）
置 田 和 永	薦 田 正 人	古 川 彰	

寄贈品・その他

国際ソロプチミスト京都—たちばな	文化体験（お茶事招待）、ビールなど
カンタトーレ ドメニコ	ワイン

皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

「研究者棟新築及び本館耐震補強・改修工事支援事業」
特定寄附金の募集に関わる募金目論見書

寄附金等取扱規程第 4 条に基づく特定寄附金についての目論見書内容は以下のとおりである。

平成 29 年 7 月 31 日

公益財団法人 京都国際学生の家

1. 「本館耐震補強・改修工事及び研究者棟新築支援事業」に関わる寄附金の募集

①募集総額：250,000 千円

②募集期間：2017 年 8 月 1 日～ 2019 年 6 月 30 日

③募集対象：研究者棟の新築と本館耐震補強・改修工事

1) 研究者棟新築：100,000 千円

2) 本館耐震補強・改修工事：150,000 千円

④募集理由：建築後半世紀が経ち、建物が現在の耐震基準に合わず、本館の耐震工事と改修工事、及び研究者棟の取り壊しと新研究者棟の新築工事費用にあて、50 有余年続く個人と個人の出会いを重視した国際交流拠点としての活動を継続するため

⑤資金使途：受け入れた寄附金は 100%本事業（事業内管理経費を含む）に充当する。

以上

(公財) 京都「国際学生の家」の略史

[illegible]

[illegible]

1

71

(公財) 京都「国際学生の家」の略史

	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
			4月		3月		3月			3月
			山本 M.Yamamoto		北島 K.Kitajima J.Phillips		飯田 Y.Iida A.Hidding			崔 Y.Choi

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31
	創立四十五周年記念式典(十一月六日) 西島安則評議員逝去(九月三日) 田村武理事逝去(六月三十日) 石井米雄理事逝去(二月十二日)		公益財団法人移行申請(三月三十一日)	公益財団法人認可(四月一日)	第一次耐震審査実施(本館・西館)(十月三十一日)	寄付金税額控除認可(三月三十日)	創立五十周年記念式典(十一月七日)	第二次耐震審査実施(本館)(五月三十一日)	本館耐震・リフォーム案 西館立替案作成(三月)	募金趣意書作成(九月二十七日) 募金趣意書作成(十月一日) 第一期工事・募金趣意書作成(二月二十六日)

(公財) 京都「国際学生の家」利用者の集計

● 学生の部（レジデント）

国籍別利用者実数

1965 年 4 月から 2019 年 3 月までの合計 82 ケ国 1023 名

アフガニスタン	6 名	コンゴ	1 名
アメリカ	45 名	コートジボアール	1 名
アルゼンチン	3 名	ザイール	1 名
イギリス	12 名	シンガポール	18 名
イスラエル	1 名	ジンバブエ	1 名
イタリア	5 名	スイス	12 名
イラク	3 名	スウェーデン	3 名
イラン	13 名	スーダン	1 名
インド	20 名	スペイン	1 名
インドネシア	25 名	スリランカ	11 名
ウズベキスタン	2 名	セネガル	1 名
エジプト	7 名	タイ	42 名
エストニア	2 名	台湾	27 名
エチオピア	2 名	タンザニア	4 名
オーストラリア	2 名	チェコスロバキア	4 名
オーストリア	1 名	中国	59 名
オランダ	11 名	北朝鮮	4 名
カザフスタン	1 名	チリ	3 名
ガーナ	1 名	ドイツ	43 名
カナダ	4 名	ドミニカ	1 名
韓国	51 名	トルコ	12 名
カンボジア	13 名	ナイジェリア	3 名
キプロス	1 名	日本	329 名
キルギス	1 名	ニュージーランド	7 名
グルジア	1 名	ネパール	6 名
ケニア	6 名	ノルウェー	4 名
コロンビア	1 名	パキスタン	6 名

ハンガリー	6名	ホンジュラス	1名
バングラデシュ	5名	マリ	1名
フィリピン	16名	マレーシア	23名
フィンランド	1名	マダガスカル	1名
ブラジル	9名	南アフリカ	1名
フランス	9名	ミャンマー	16名
ブータン	1名	メキシコ	2名
ベトナム	35名	モロッコ	4名
ベネズエラ	2名	モンゴル	10名
ペルー	3名	ユーゴスラビア	4名
ポーランド	5名	ラオス	1名
ボリビア	1名	リトアニア	1名
ポルトガル	3名	ルーマニア	1名
香港	14名	レバノン	1名

● 学者・研究者の部（スカラー）

国籍別利用者実数（同一人物の利用・同行家族を含まない）

1965年4月から2018年12月までの合計 95ヶ国 3071名（内国籍記載なし17名）

アイルランド	1名	ウズベキスタン	1名
アフガニスタン	1名	ウルグアイ	1名
アメリカ	335名	エジプト	26名
アルジェリア	4名	エチオピア	1名
アルゼンチン	1名	オーストラリア	39名
アルメニア	1名	オーストリア	19名
イギリス	111名	オランダ	32名
イスラエル	11名	ガーナ	3名
イタリア	44名	カザフスタン	1名
イラク	3名	カナダ	47名
イラン	20名	カメルーン	1名
インド	104名	韓国	206名
インドネシア	115名	カンボジア	4名
ウガンダ	1名	旧ソビエト連邦	14名
ウクライナ	9名	キルギス	1名

ギリシャ	4 名	ノルウェー	7 名
ケニア	3 名	パキスタン	14 名
コスタリカ	2 名	バーレーン	1 名
コロンビア	1 名	ハンガリー	10 名
コンゴ	1 名	バングラデシュ	16 名
ザイール	1 名	フィリピン	38 名
サウジアラビア	1 名	フィンランド	10 名
ザンビア	1 名	ブラジル	27 名
シリア	1 名	フランス	108 名
シンガポール	25 名	ブルガリア	4 名
スイス	185 名	ベトナム	35 名
スウェーデン	14 名	ペルー	6 名
スーダン	3 名	ベルギー	7 名
スペイン	11 名	ポーランド	32 名
スリランカ	11 名	ボリビア	1 名
スロヴェニア	1 名	ポルトガル	8 名
セルビア	1 名	香港	43 名
タイ	187 名	ホンジュラス	1 名
台湾	95 名	マダガスカル	1 名
タンザニア	8 名	マレーシア	39 名
チェコスロバキア	12 名	南アフリカ	2 名
中国	172 名	ミャンマー	10 名
チュニジア	2 名	メキシコ	7 名
朝鮮（在日）	3 名	モロッコ	6 名
チリ	7 名	モンゴル	1 名
デンマーク	5 名	ユーゴスラビア	13 名
ドイツ	298 名	ラオス	2 名
ドミニカ	2 名	ラトビア	3 名
トルコ	22 名	リトアニア	1 名
ナイジェリア	4 名	ルーマニア	3 名
日本	328 名	ルクセンブルグ	3 名
ニュージーランド	10 名	ロシア	23 名
ネパール	10 名		

公益財団法人京都国際学生の家後援会会則

(目的)

第1条 この規程は、公益財団法人京都国際学生の家（以下財団という。）の後援会員の入会及び退会並びに会費の納入に関し、必要な事項を定めるものとする。

(会員)

第2条 財団の事業に賛同し、財団を支援する意を有するものは、後援会員となることができる。

2 会員になろうとする者は、所定の申込書を、代表理事あてに提出するものとする。

(会費)

第3条 会員は理事会で定められた会費を、入会時に納入するものとする。

2 年会費は会員種別に応じて下記各号のとおりとする。

(1) 個人会員（OM 会員） 年額 一口 5,000 円

(2) 法人・団体会員 年額 一口 30,000 円

*OM= Old Member、元寮生

(退会)

第4条 会員は、いつでも退会届を財団に提出することにより、退会することができる。

2 前項の場合、当該年度の会費が未納のときは、これを納入しなければならない。

3 既納の会費は、いかなる理由があってもこれを返還しない。

(改正)

第5条 この規程の改正は、理事会の議決を経て行うものとする。

附則

1 この会則の施行に関し、必要な事項は別に定める。

2 この会則は、公益財団法人の設立登記の日（平成 25 年 4 月 1 日）から施行する。

3 この改正会則は、平成 26 年 3 月 10 日より施行する。（平成 26 年 3 月 8 日第 3 回理事会にて改訂）

施設概要

所在地	京都府京都市左京区聖護院東町 10		
敷地面積	1,900.28 m ²		
建築面積	531.21 m ²		
延面積	1,778.78 m ²		
構造	本館	鉄筋コンクリート造	地下 1 階 地上 4 階
	西館	鉄筋コンクリート造	地上 2 階
各階用途	本館 1 階	事務室、会議室、ラウンジ、遊戯室、行事用キッチン	
	本館 2・4 階	学生居室 34 室、キッチン 2 室、シャワールーム 2 室	
	本館 3 階	ハウスペアレンツ室、客室 7 室	
	本館地下	洗濯室、トイレ、倉庫、機械室	
	西館	客室 5 室、ボーイスカウト会議室	
学生居室	面積 13 m ²		
	洗面設備、ベッド、クローゼット、本棚、机、椅子、エアコン		
その他設備	日本庭園、バレーボール・コート、卓球台、ビリヤード、ピアノ		

編集後記

薦田 正人

(イヤーブック編集委員、弁理士・薦田内外国特許事務所所長)

内海博司理事長による巻頭言「留学生を翻弄する政治と留学生基金」においては、このハウスに生活した中国人、ビルマ（ミャンマー）人、ベトナム人の留学生の方達が自国の激しい政治的混乱によりいかに翻弄され、その運命がいかに激動したかがビビッドに描かれています。

そこに登場するビルマ人、ベトナム人の方達とは、私は同時期にこのハウスに住んでおりました。当時の状況が鮮明に思い出されますとともに、あの方達が波瀾万丈な、困難の大きい人生を送られたんだという思いを改めて強くしました。

この巻頭言の冒頭においては、「留学生や外国人観光客等と交流された経験のある人は、……ヒトとしての違いは全く無く、同じ『地球市民』であるという実感を持ったと思います。」と述べられていますが、私も、確かに、当時、まったく同じ実感をもっていました。アメリカ人、日本人、中国人……などと、いっしょに生活し、行動し、議論をしていますと、「この男は何人だ。」などという意識が完全に頭から飛んでしまっていました。これは、おそらく、現在、国際学校に通う子供達の場合はもっともっと徹底しているのだろうなと思います。

私は、永らく、弁理士という、知的財産権を取り扱う職業に従事しておりますが、知的財産権を取り扱う弁理士や弁護士は国境を越えて交流があり、ネットワークを形成しています。このような交流の中では、ハウスにいたところと同じく、相手の国籍を意識することなく行動し、共同の活動をしています。そのような意味で、私は、現在も、意図することなく、ハウスの延長上の生活を送っています。

同じく内海理事長による「【募金活動について】 第一期工事 募金趣意書 国際学生の家（HdB）存続のための募金のお願い」によれば、ハウスの現状は、老朽化のため、本館は耐震対策を、また、研究者用の別館は新築建て直しを迫られており、そのため、2.5 億円の資金が必要であるところ、これがほとんど集まらないため、取り敢えずは、前者だけを行う、とのことです。しかし、それでも、約3千万円が不足しています。募金活動が円滑に進み、本館の耐震対策が進むことを祈るばかりです。

平野克己募金委員会事務局長、評議委員による「募金活動報告と今後の課題」は、今までの募金活動を報告し、今後の展望を詳しく示すものです。

ところで、日本では、これまで、単純労働を行う外国人が 130 万人程度いると言わ

れていましたが、彼らのほとんどは労働ビザを持たずに、技能実習生や留学生の資格で就労していました。今回、政府は、単純労働者を含む外国人労働者の受け入れを拡大する入管難民法などの法律を制定しました。早ければこの4月から施行されます。内海理事長による「留学生と外国人労働者問題」は、この点の歴史的経過について詳しく解説されています。また、村田翼夫理事による「日本語教育の必要性和課題ー日本語指導の体験をもとにー」は、外国人労働者の増加に伴う日本語教育の重要性について、これまでのご自身の体験に基づいて説明されています。

以上のほか、嘉田良平理事の「アジアで広がる自然災害のリスクにどう対応すべきかー新たな資源管理システムと日本の経験ー」、倉田麻里氏による「三重の田舎にも『出会い』の場をーゲストハウスイロンゴをオープン！ー」、Arno Suzuki氏による「Changes in student housing」、Adriana Hidding ハウスペアレントによる「Health and Wellbeing of Academic Visitors in Kyoto」をそれぞれ面白く読ませて頂きました。



公益財団法人 京都「国際学生の家」へのご寄付に対する 寄 付 金 控 除 に つ い て

当財団への寄付金に関しては、税務上の寄付金控除があります。

●個人の場合

寄付金が2千円を超える場合には、その超えた金額が当該年度の課税所得から所得控除として控除されます。

●法人の場合

特定寄付金として一般寄付金の損金算入限度額と別枠で損金算入限度額に相当する金額まで損金に算入できます。

これらのご申告の際には当財団発行の領収書をご提出ください。

※本誌 P. 76 に後援会会則を掲載しております。

Haus der Begegnung Kyoto, Year Book Vol. 43

(Kyoto International Student House)
10, Shogoin-Higashimachi, Sakyo-ku,
Kyoto, 606-8325 JAPAN

京都国際学生の家 イヤーブック 第43号

編集者	内海 博司	村田 翼夫
	蔦田 正人	鈴木 松郎
	古川 千佳	前川 佳世子
	飯田 悠哉	A. Hidding
	金 羅煥	Shin Mingyeong

発行日 2019年3月31日

発行者 公益財団法人 京都国際学生の家
〒606-8325

京都市左京区聖護院東町10

TEL 075-771-3648

印刷所 ㈱北斗プリント社 (075-791-6125)

